

ドミトリー・ロヴィンスキイと

ロシア民衆版画（ルボーク）研究

坂内徳明

- 一 はじめに
- 二 家、学校、法曹界
- 三 学際的美術史学の開始
- 四 『肖像画事典』ほか
- 五 『ロシア民衆絵画』の上梓
- 六 その死
- 七 ロヴィンスキイ以後

註

参考文献

一 はじめに

ルポークと呼ばれるロシアの民衆版画は一七世紀半ばに誕生し、一八、一九世紀を通じて社会の各階層で圧倒的な人気を博した。人々には「すでにおなじみ」の題材や目を引く新鮮な話題が取り上げられ、この図柄を「素朴な」構図・画面構成と線・タッチで彫り、基本的には白黒で摺ったものに色づけしたもの、しかもその色も安っぽく、時にけばけばしいほどの原色で、種類も多くはない、塗り方も雑で、いかにも「俗悪な」出来の版画がルポークである。文字どおり名前不詳の絵師・彫師・摺師の手になるこの作品群は、街頭の行商人の手で、あるいは露店の本屋で安く販売され、店頭で立ち見されるか、購入されて読み(見ては)捨てられるか、持ち帰られて農民小屋の壁にイコン(聖像画)の脇かどこかに貼られてあった。それは一般庶民には欠かせぬ室内インテリアであり、かつ、日常の娯楽や啓蒙、生活百科的な教育の役割をも果たしていた。また、ルポークは一枚絵ばかりでなく、大衆文学の口絵やイラストレーションとして利用されたほか、住居・生活用具の装飾(扉絵や紡ぎ台紋様など)としても人々の生活の中に深く浸透していった。そして、二〇世紀初頭に始まるロシア・アヴァンギャルド芸術運動やロシア革命の時期には、多くのプロパガンダ・ポスターや看板として街頭を飾った。さらに現代においてもロシア庶民の記憶に確実に生き続け、例えば新聞紙面のカットや町の広告、前記した生活内の各種装飾、民芸品・土産物の模様などの中に、いわばフオーコロリズムとして機能しているのである。したがって、ルポークは、近現代のロシア人の世界観を知る上できわめて重要な視覚的表象文化であると言ってよいであろう。⁽¹⁾

一九世紀後半、このルポークの収集と研究に没頭した人物がいた。ドミトリー・ロヴィンスキイ(一八二四—一九五

年）である。もっとも、以下に記すとおり、かれの仕事はこのルボーク研究のみに限られない。レンブラント作品の収集とカタログ作成、ロシアのイコンや肖像画に関する資料集成と研究などの美術史家としての活躍は当時広く知られていたし、そのみならず、本職である法曹界の現場ならびに一八六〇年代の司法制度改革に深く関わった法律家として、かれの知名度は同時代においてきわめて高いものがあつた。かれのエネルギーギッシュな仕事ぶりを語る時に「鉄のようなエネルギー」「勤勉の手本」という言葉がくり返されるゆえんである。このことは、かれの肖像画の精悍かつ高潔な風貌を瞥見すれば十分理解できる（B・E・マコフスキイの肖像画を参照）。このような人物であるにもかかわらず、かれの生涯を全体として記述した伝記はこれまできわめて不完全なものしか存在せず、そのことは不思議でもあり、大変残念である。⁽²⁾

以下で、かれの生涯とルボーク研究に関わる仕事の基本的なアウトラインを素描し、また、かれ以後、現代までのルボーク研究を概観したい。

二 家、学校、法曹界

ドミトリイ・アレクサンドロヴィチ・ロヴィンスキイは一八二四年八月一六日（以下では旧暦に従う。現在の暦では二八日）にモスクワで生まれた。家は在スモレンスクのポーランド・シュラフタ（貴族）出身の古い家系で、代々軍人の家である。父親のアレクサンドル（一七七八一—一八三八年）はナポレオンとの大祖国戦争でニジェゴロド国民軍を指揮したほか、モスクワ市第二警視長官（ポリツメイストル）を一八一五年から三〇年までの一五年にわたって勤めた人物である。A・C・シュリギンの手助けをしてモスクワ消防隊を創設するなどの大きな功績があつた。スラ



B. E. マコフスキイの版画（1896年）による Д. А. ロヴィンスキイ

ウ派のサークルと強い結びつきを持っていたほか、モスクワに対する熱烈な郷土愛は息子にも影響を与えたという。母親のアンナ（一七八四―一八六三年）は、エカテリーナ二世期の宮廷侍医Ⅱ・Ⅱ・メッシングの娘である。子供はドミトリイを含め九人兄弟姉妹であった。⁽³⁾

かれらの両親はモスクワのノヴォデヴィチ墓地に葬られている。母方の親類には、ドミトリイの仕事全体に大きな影響を与え、ルボーク収集の必要をアドバイスすることになる歴史家・文献学者・作家のミハイル・ポゴージンがいた。

父親の峻厳さは職業柄であろうが、エピソードに彩られている。一例は、A・C・グリボエドフとのやりとりである。ちょうどドミトリイが生まれた一八二四年、当時著名な戯曲家であり、外交官（イラン大使）でもあったグリボエドフがモスクワに短期間滞在した折、友人の音楽家A・A・アリアビエフと劇場へ行き、幕間で俳優たちに取り囲まれていた。そこに苦虫を潰した表情の警視長官がお供を連れて現れる。「名前は？」「グリボエドフだ」。すると後ろにいたお供の警官に向かって命ずる、「クジミン、書き留めておけ」。今度は、グリボエドフがひるむことなく、「では、あなたの名前は？」「何のことか」「あなたが誰かを知りたいのです」「私は警視長官のロヴィンスキイだ」。するとグリボエドフはこの長官のふりをまねながら、わきに立っていた友人に向かって言った、「アリアビエフ、書き留めておけ」⁽⁴⁾

このエピソードはロヴィンスキイの父親の性格を物語っているだけではない。一八二五年に起こるデカブリスト事件のまさに前夜、世代間の正面对決の様相がここにある。一八世紀末から一九世紀初頭、さらに一八一二年の対ナポレオン戦争へと激動期を生き抜いてきた旧世代グループと、それに続くプーシキンの世代の若きインテリゲンツィアたちの相克が見られるのである。それは、多くの新旧論争や世代間の衝突を生み、有名なシシコフ対カラムジン

の文体・言語論争をはじめ、後の三〇年代半ばに開始するスラヴ派・西欧派論争へとつながっていく、一言で言えば、言説（神話）としての「ロシア文化」とその実体の理解と認識のズレをめぐってなされた議論の時代であった。むろん、ロヴィンスキイの父親とグリボエドフの対峙はそのまま息子ドミトリイ自身の性格に影響をもたらしたわけでもないし、まして同時代的背景となったのでもない。しかし、息子の生涯と仕事、その時代を以下で見えていくと、そこには、父親とは相反する性格ばかりでなく、一九世紀半ば以降に急激に変化していく時代の雰囲気浮かび上がってくるはずである。おそらくは一八世紀後半・末に始まり、一八三〇年代頃まで継続したと考えられる、前記した「ロシア文化」という言説に関する議論の「産物」こそがロヴィンスキイの時代、より具体的に言えば一八六〇年代の「民衆文化発見」の時代とその仕事であった。

ドミトリイの生涯に戻ろう。息子は、おそらくは父の意向だけでなく、ポゴーチンの勧めがあったためと思われるが、ペテルブルグにできて間もない帝立法学校へ入学することが決意される。一八三六年一月付けで父親が学校当局に宛てた文書が残っている。そこには、「家族が大人数で資産が十分でないことから、完全な教育を自身の資金でまかなうことができません。特に、九人の子供の中の息子ドミトリイは今年一二歳になりますが、年齢に比して学業の成果が目覚ましく、社会的な仕事には際立った能力がある者ですので、何とかして教育を施してやりたいと思います」と書かれている。要するに学費支援の申請である。家系や父親の身分からすれば、教育資金不足というのは少々腑に落ちぬところがあり、父の作文内容は割り引かなくてはなるまい。父親はこの他、地位と役職を利用して息子の入学のためにさまざまな方策を講じたが、うまくいかなかったという⁽⁵⁾。それが実現するのは二年後の一八三八年、ドミトリイが一四歳の時である。親元を離れて、ペテルブルグでの学業時代が始まることになる。

ロヴィンスキイが入学した帝立法学校は、裁判官と司法省幹部の養成を目的として一八三五年に創設された学校である。以下で述べるオリデンブルグスキイの建議にもとづき、ニコライ一世の勅令によって作られ、一九一七年まで存続した。イニシアチヴを取ったのは、一八三〇年代前半のロシア法典編纂事業の中心人物であったミハイル・M・スペランスキイであり、資金提供は、ニコライ一世の甥でアレクサンドル二世の従兄弟のピョートル・Γ・オリデンブルグスキイ公がおこなった。ドイツのオリデンブルグ家に出自を持つかれは、政治的手腕よりもむしろ教育・文化面で自身の能力を発揮した人物である。そのかれがこの法学校の創立者・監督官となった。法学校は一〇―一二歳で入学、修学年は六年（一八三七年から七年）の寄宿制学校だった。卒業後一定期間、司法部で働くことが義務づけられていた。⁽⁶⁾

学校があつた場所は、ペテルブルグ市内の一等地、夏の庭園の東側で、今の地名で言えばチャイコフスキイ通りとフォンタンカ川河岸通り、フォードロフ通りとソリャノイ横町に囲まれた区画にあり、現在は、セルギエフ公衆浴場、数理経済研究所、「レングラジダンプロジェクト」研究所などの建物が立ち並ぶ場所である。⁽⁷⁾

設立目的からみて、エリート養成を目的としたレヴェルの高い学校であることは当然であり、厳格な校風を持つことは十分に想像される。時代を担うべく法律家としてのキャリアに対する要求度は高く、世襲貴族の子弟だからと言ってただちに入学が可能ではなかった（ロヴィンスキイの場合もそうだったのだろう）。さらに、卒業までに二つないし三つの外国語習得（多くがドイツ語とフランス語）が必須であり、さらには、ローマ法学習との関連からラテン語も義務、ギリシャ語は希望者に補講として教えられた。⁽⁸⁾ また、貴族師弟の家庭的な雰囲気、特に創設間もない時代にに見られ、その評判で入学を希望する者も多かった。もっとも、世紀半ば以降にはその官僚主義的な重苦しさや軍隊式教育方針にたいする不満の高まりも見られるようになった。ペトラシェフスキイ事件が勃発した一八四九年に

は、学生の中にそのサークルと関わりを持つ者が発覚したり、もとリガ警察長官のA・II・ヤズィコフが校長に就任して、それまでの開放的な校風を一変させたことなどが大きな転機となった。⁽⁹⁾

しかし、エリート教育の「自由さ」はその後もこの学校の中核的な精神として維持された。修学年の六年のうち、上級の二年間は法律専門教育にあてられたが、それ以前の四年間の下級クラスではギムナジウムプログラムによる教養教育がなされた。おそらくは、芸術を愛し、すぐれた啓蒙家であったオリデンブルグスキイ自身の性格が大きく影響して（かれがヴァシリエフスキイ島南端の邸宅に学生を招待して開いた家庭コンサート・パーティは当時大評判となった）、文学や音楽、美術などの教育にも大きな役割が与えられていた。II・II・チャイコフスキイやイヴァン・C・アクサーコフ（後者は一八四二年の第一期卒業生）がここで学んだことはその例証である。この二人のほか、卒業生は詩人のA・H・アプーフチン、作家A・M・ジエムチュージニコフ、音楽家A・H・セローフ、スターソフ兄弟（特に、兄で芸術評論家として知られるヴラヂーミルとロヴィンスキイの友情は終生変わらなかった）、そして、作家B・B・ナポコフの祖父と父（前者はペテロパウロ要塞司令官、その後に法務大臣、後者は母校で刑法を教えた。かれはロヴィンスキイの二つ年下で、一八四五年に法学校卒業）、K・II・ポベドノスツェフなど、一九一七年までの八二年間で二一五三人を数えた。⁽¹⁰⁾

ロヴィンスキイがどのような学校生活を送ったのかはほとんど判明できない。わずかに、「なにか」と題された手書き同人雑誌が学生たちの手で発行されていたこと、その一八四一年第一号に、ロヴィンスキイの作品（「シャラーダ」〔「学校生活の場面」〕が掲載されていることが知られるだけである。⁽¹¹⁾この時代のロシア社会全体の方向と若いインテリゲンツィア予備軍の知的関心を想起するまでもなく、一八二〇年代人がまさに青年時代を過ごし、その有り余るエネルギーが爆発するのが目前に見えていた。ロヴィンスキイが一八六〇年代の法制度改革に奮進努力することは以

下でふれるが、一八二〇年代生まれの法学校の卒業生がその改革だけでなく、一八六〇年代の一連の「大改革」の中核的役割を果たすことになる。⁽¹²⁾

卒業から半世紀後、ロヴィンスキイはかつての創立者ビョートル・オリデンブルグスキイのことを思い起こし、パリからビョートルの息子のアレクサンドル（一九世紀後半に法学校長だった）にたいして次のように書き送っている。「私はすべてを法学校に負っています。そして、偉大な創立者の聖なる御姿を私は心の奥深く、大切にしまっており、それは全生涯を通して善行をなし、そして、自分の教え子たちであるわれわれを血のつながった子供のように愛してくれたのです」⁽¹³⁾

一八四四年六月一〇日に法学校を卒業したロヴィンスキイは、三日後の一三日にはモスクワに戻って法曹界の一員として働き始めている。ただし、就職後ただちに、法律とは別のもう一つの関心が芽生えていた。それが絵画・版画収集であり、一八四四年末には自身のコレクションが生まれつつあったという。何をきっかけとして収集を始めたのかについてかれ自身は語っていない。しかし、こうした興味はやはり法学校の知的雰囲気の影響と考えざるをえないだろう。

司法省勤務となり、現場の法律家としての仕事を開始したかれは、そのすぐれた能力を存分に発揮し、目覚ましい昇進ぶりを残すことになる。最初の勤務先はセナート（最高裁判所）のモスクワにあった第七部である。身分は、一八四四年一月から裁判所書記補、一八四八年始めからモスクワ県監督官として、さらに一八五〇—一八五三年にはモスクワ刑事院副院長、そして一八五三年八月からはモスクワ県検事となる。いまだ二九歳であった。その後、一八七〇年までモスクワ県検事、モスクワ控訴院検事長などを歴任して精力的に働いた。特に、一八六〇年代の諸改革を目前とした、変化が激しく困難な時代状況下にあっただけでなく、モスクワ県知事がアルセニイ・A・ザクレフスキイで

あったことはロヴィンスキイに多くの負担と苦勞を与えた。一八四八年から五九年まで県知事の地位にあったザクレフスキイ伯爵は「モスクワの家長」として「モスクワっ子を恐怖に陥れた」と言われるほどの人物であり、改革時代の到来そのものに真っ向から反対していたためである（後述のルボーク検閲制度を導入したのもかれだった）。ロヴィンスキイは、このトップリーダーとの衝突と関係維持に多くの時間を割きながら、ズヴェニゴロド貴族代議員としても活躍し、農奴解放実現のための調整に邁進している。

三 学際的美術史学の開始

法律家としての忙しい仕事のかたわら、モスクワ市内ならびに近郊をはじめロシア各地を歩き回り、かつ図書館や文書館に足しげく通うロヴィンスキイの姿があった。それはイヴァン・E・ザベリン（一八二〇—一九〇八年）と、そして従叔父のミハイル・II・ポゴージン（一八〇〇—七五年）の影響によるものと考えられる。ザベリンとポゴージンが一九世紀後半のロシア文化史研究を代表する二人であることを疑うことはできない。『一六一—一七世紀ロシア皇帝の家庭生活』（一八六二年）、『一六一—一七世紀ロシア皇后の家庭生活』（一八七二年）、『ロシア古代・歴史研究試論』（一八七—一七三年）、『モスクワ市史』（一九〇二年）などの著作で知られ、都市史・社会史・習俗史・芸術史などをカバーして独自の文化史学を構想したザベリン¹⁴、「モスクワ人」などの雑誌編集と作家活動の一方で、中世を含む多数の歴史資料の収集家として知られたポゴージン——二人ともロシア・フィロロジ—基礎研究（ロシア語というアルフェオロギヤ）を花開かせた巨人である。かれらがロヴィンスキイの近くにいただけでなく、文字どおり先達として大きな影響を与えたのはごく自然なことであった。

ザベールリンの回想によれば、かれがドミトリイと知り合ったのは一八四四年の秋、モスクワのモギリツィのウスベ
ーニエ（聖母就寝）教会近くにあったロヴィンスキイの母親の家であったという。当時、弱冠二〇歳のロヴィンスキ
イはペテルブルグでの修学を終え、モスクワに戻ってすでにセナートで働いていた。親交の契機となったのは、ロヴ
ィンスキイの姉妹であるマリヤとエレナがザベールリンの妻と聖エカテリーナ勲章学校（在ペテルブルグ）で共に
学んでいたことであつた。一八四四年冬にザベールリン家の人々がロヴィンスキイ家を訪問している。

当時、このロヴィンスキイの母親の家はサロンの名場所であつた。ここをつねに訪問していた者として、ロヴィン
スキイのニコライとドミトリイ兄弟、ザベールリン、ポベドノスツェフ、後述するアフシャルーモフ、さらに後の詩人
Я・П・ポロンスキイ、作家Д・В・グリゴロヴィチ、歴史家В・Н・チチエーリン、С・Н・モソロフなどの名
前があがっている。⁽¹⁶⁾この場所でザベールリンとドミトリイの交流が深まったことは十分に考えられる。やはりザベール
リンの思い出によれば、最初の二人の関係はごく形式的なものだったという。その頃のドミトリイは（ただし、すぐに
ザベールリンが、「その後もそうだが」と付け加えているのを見ると、それはロヴィンスキイの性格そのものだったの
だろう）、一般的に他人を避け、余計で必要がない交際をいやがっていた。しかし、次第に二人の間の会話には熱が
入り、おたがいの関心が深く共有されるようになっていく。その後、ザベールリンがロヴィンスキイの住む母親の家近
くに引越しをしたこともあって、頻繁に会うこととなった。当時、ザベールリンの職場はクレムリン武器庫の稀覯文書
部門であつた。この職場を訪問したドミトリイは、最初は西欧美術作品に興味を持っていたが、その後、ザベールリン
や後述のポゴーチンの影響もあってロシアの古美術品へ関心が移っていったという。

歴史家で四歳年長のザベールリンが残した「回想」には、一八四七年の二週間の旅行についての様子が語られている。
この時の行く先は、ロストフ・ベリーキイ、ペレスラーヴリィザレスキイなど、徒歩で一日三〇露里（一露里はほぼ

一キロメートル)を行くことが予定として決められていたが、実際は四〇露里を進んだという。計画を厳格に守るだけでなく、計画以上に目的に邁進するロヴィンスキイのためであると、ザベーリンはやんわりとロヴィンスキイの性格を記述している。さらには、この旅行をすることで知りえたロヴィンスキイの「完全なりアリストぶり」、そしてロヴィンスキイの関心が、当初の「芸術的」なものから「歴史学」「宗教学」「考古学」など多方面なものへと広がっていったことなども記されている。また、ロヴィンスキイの家庭環境、かれ自身の育ちや地位・身分からすれば、当時のロシア社会ではかれは「旦那」(バーリン)と呼ばれるのが普通だったが、そうしたものをかれは持っていないかった、そもそもかれにはそうした「貴族文化の痕跡」がまったくなかった、とザベーリンは評している。ロヴィンスキイの父親の時代との世代間の段差については、先にグリボエードフとのやりとりのエピソードを記した際に述べたが、この友人の回想にも「新しい世代」の人々の登場が見て取れる。

また、近年公刊されたザベーリンの「日誌」一八四八年の箇所にも、モスクワ郊外の村々を歩き回る様子がエピソードも交えて克明に記されている。二人は自分たちのグループのことを戯れに「道を踏みしめて歩け歩けの協会」と呼んでいたという。ちなみに、ザベーリンはこの年の「フィールドワーク」を論文(「モスクワ県クリン郡のコリャダー」[クリスマス週間の儀礼歌])として発表している。

ロヴィンスキイとザベーリンの小旅行には、ロヴィンスキイの兄で、スタンケーヴィチ・サークルにシンパシーを持っていたニコライ、友人でのちに作家となるH・D・アフシャルモフ(一八二〇—一九三年)⁽¹⁸⁾が同行することも多かった。それは、モスクワ市内や近郊(ポドモスコヴィエ)はむろんのこと、中央ロシアやさらに遠方に及んだノーヴィ・エルサレム、ズヴェニゴロド、トロイツェセルギエフ(ザゴールスク)、ペレスラーヴリ、ロストフ、ヴラヂーミル、スズダリ、ヴォルガ川を使ってトヴェーリやニージニイ・ノヴゴロドなどなど。そうした各土地の名

所・旧跡の見学がイコンなどの美術作品の収集と研究へと向かうことは自然だろう。そして、対象はイコンや教会建築に限ることなく、より幅広い分野へ拡大されていった。

もう一人のポゴージンが、ロヴィンスキイにとっては年長の親戚ということもあって、かれは子供時代から、モスクワのデーヴィチエ・ポーレ（娘ケ原）路地（現在のポゴージン通り、一二番地）にあったポゴージンの家を訪問していたはずである。ポゴージンの家には「古文書文庫」があって、ロシアの歴史・文化に関する多数の貴重な資料が収蔵されていたばかりか、そこにはサロンが形成されていて、モスクワの多くのインテリゲンツィアが集まっていた。そうした人々をロヴィンスキイは子供の頃から見ていたはずである。ザベーリンもこのポゴージン・サロンの「常連」であったから、ここにポゴージンⅡザベーリンⅡロヴィンスキイというネットワークがほぼ出来上がったことになる。ただし、単純な世代論によるまでもなく、この場合、ポゴージンは他の二人からすれば二〇年年長の先達であり、ザベーリンとロヴィンスキイという一八二〇年代人が果たした役割が重要となる。これについて、ロシア科学アカデミー会員のЛ・Н・マイコフはロヴィンスキイ死後の記念会議の場で次のように述べる。

ザベーリンとロヴィンスキイは一つと同じ世代に属しています。それは今から半世紀以前のことであり、ロシアの過去とナロードノスチ「民族性、民衆性」の研究に多くの関心が向けられ、ロシア思想が高揚した時代に、モスクワでその青年時代を駆け抜けた人々でした。⁽¹⁹⁾

一八三〇年代半ば（プーシキン死後）から四〇年代へ、という一つの大きな転換期の中で、法学校での生活ならびにザベーリンとの交友などがロヴィンスキイの青春時代を形成した。かれの中で、考古学・歴史学・習俗史・文学

史・建築史なども視野にいたした学際的な美術史研究へのまなざしが生まれつつあった。

そうしたかれに、一つの目標ができた。それは、帝室ロシア考古学協会（一八四六年に創設）がA・C・ウヴァーロフ伯爵の発案で、懸賞論文を募集したことである。ロシア中世をテーマにロシア語によって書かれた著作を募り、その賞金を協会だけでなく、広く一般に篤志家から集めるという内容である。具体的テーマは、一七世紀末までのロシアの金属工芸、一七世紀末までのロシアの民族衣装、そして、やはり一七世紀末までのイコン画流派史の三つである。この協会の提案にたいして、ペテルブルグの商人Γ・C・クジミンは、一八五〇年三月、ロシア・イコン史の著作に銀四百ルーブリを賞金として贈りたい旨を伝え、それを協会は快く受理した。期限は同年五月より二年間だった。こうした栄誉を求めてであろう、期限開始から直後の五月に、職場から休暇をもらったロヴィンスキイの姿がペテルブルグにあった。かれはモスクワのザベリンに次のように書き送っている。「きっちり三週間、私は朝一〇時に家を出て、晩の一〇時に戻ります。週の二日は、画廊を見たり、近郊をうろろしています。残りの時間は古文書のほこりにまみれています」

そうした古文書がイコン史に関係するものであったのは当然であろう。特にその仕事については、帝室ロシア公共図書館（現在のロシア国立図書館、通称シチェドリ図書館）⁽²⁰⁾に、さらには、ルミヤンツェフ・ミュージアム⁽²¹⁾にも足しげく通い、多数の未発見資料を見出し出している。また、旧教徒の商人シリベストル・クジミンのイコン収集の存在を知ったのもこのペテルブルグでの調査の成果であろう。それは、多数の旧教徒が市内・市内周辺に局部的にかたまって住んでいたモスクワとは違い、ペテルブルグで唯一の旧教徒によるイコンのコレクションとして貴重だった。ロヴィンスキイはこのクジミン家の人々に実際に面会し、イコンに関する貴重な情報を入手し、その成果を自身の著書に残すことになる。

かれが関心をいだいたのは、イコンのみにとどまらなかった。ザベーリン宛ての手紙には、「あなたはどうか考えますか。ここでベロセリスカヤ公爵夫人のコレクションの中に一二巻の大きな本を見つけたのです。そこには、オルスフィエフが集めたロシアの版画 *serami* が収められています。每晚、それを書き写しています。あと二日ほどで終わるでしょう。この分野については芸術アカデミーやエルミタージュで版画のコレクションの中から面白いものをつくさん見つけました。ウートキンやヨルダン「ともに、エルミタージュと芸術アカデミーの版画部門責任者―引用者」などからも、版画家に関する情報をかなり集めました⁽²²⁾」。当時の知的関心状況からすれば、やはりイコンはその宗教的ならびに研究的対象として認められていたものの、版画に関しては十分な認識はまだまだ生まれていなかった。版画ならびに版画家にたいするロヴィンスキイの興味、そして民衆版画（ルボーク）への関心が誕生していた。というのも、後述するオルスフィエフの収集には、一八世紀後半に流布していたルボークが多数含まれていたからである。

ロヴィンスキイの最初の公刊論文は、ザベーリンの著作『中世ロシアの金属工芸品』の紹介文である（雑誌「祖国雑記」一八五三年八月号）。すでに述べたように、ザベーリンを友人として仰ぎ、私淑していた感さえある若い法律家にとって、自分の学問上の最初の論文テーマの選択はきわめて適切であった。

まとまった最初の仕事としては、一八五六年五月に刊行された『一七世紀末までのロシア・イコン画諸派の歴史』が大きな成果である。一八五〇年に応募告示があった考古学協会の懸賞論文として書かれ、懸賞期限の一八五二年五月に提出され、入賞したのだが、受賞からようやく四年後に日の目を見たのである。

ここには、以後のかれの仕事にそのままつながらず方法がすでに明確に表現されている。その方法とは、関連データの「事典化」―周到に収集された資料情報をリスト化し、一覧できる形にしようとするものであり、特に個人項目を

たてて、そこにその個人のバイオグラフィと作品リストを付すというものである。この『歴史』に収録された、一世紀からのイコン画家の数は七百名を越え、草稿には付録部分に「イコン画法」指南書からの抜き書きや画帳も含まれたという(ただし、これらは本の刊行時には収められなかった。また、古いイコンのリスト、アンドレイ・ルブリョフならびにパレフ「細密画をともなった漆塗りの絵のことで、現代も美術工芸・民芸品などに残る」の名工の作品に関する章も検閲によって削除された)。この仕事はかれの徹底したアーカイヴ調査と、そして何よりもザベリンらとともにおこなったモスクワならびに諸地方の調査旅行の集大成であった。スターソフは、この仕事の準備のためにロヴィンスキイが「数年を費やし、ロシアの古いイコンを調査すべくかれはロシア各地の多くの教会や修道院、個人のコレクション、特にモスクワの商人や旧教徒たちのコレクションを見て回った」と記して、新しい分野開拓の努力を高く評価した。

かれがイコン研究からスタートしたことは、当時の美術(史)研究の常識からすればしごくあたりまえのことであろう。一九世紀半ばのΦ・И・ブスラーエフらの登場によって、ようやくイコンもそれまでの信仰対象のみの段階から脱しつつあったとはいえ、イコン以外の美術史が構想されることは困難だったためである。

研究者としてロヴィンスキイの名前を確定したかの感があるこの『歴史』は、文字どおり新たな美術史研究の方向を示唆するものであった。ポゴージンはこの仕事を評して、「最大の価値は、大部分がまったく新しい情報と説得的な結論にある」とした。この著作に対して、ロシア科学アカデミーは小ウヴァーロフ賞を与え、若き美術史学徒の門出を祝った。

これに続く仕事は『一七二五年以前のロシア銅版・木版画概観』である。今回の仕事は難産であった。完成原稿が一八五七年に考古学協会へ提出、若干の手直し後、翌年にロシア科学アカデミーへ提出された。タイトルにある一七

二五年は、ロシア科学アカデミー創設の年であり、それ以前に存在する、イコンを除いたロシア美術史を記述したものである。これにたいしては、法律学校以来の友人で批評家のスターソフが新しい仕事として評価する一方、厳しい批評を浴びせた。リヴォフ、ヴィリノの印刷物、ベラルーシのフランツィスク・スコリーナによる出版物の言及がないこと、ルボークに関する記述が見られないなどの批判である。ロシア最初の版画史の試みではあったが、資料なりに認識の点で不十分の印象は拭いきれなかったのである。ただし、すでにこの時点でかれのコレクションは、ロシア版画のみに限っても三千点を越えていた⁽²³⁾という。

ロヴィンスキイはスターソフの批判を是として、前手的な手直しに六年を費やした。一八六四年に完成した改訂版はロシア科学アカデミーに提出され、再度小ウヴァーロフ賞を受賞した。『ロシア版画家と作品、一五六四年から芸術アカデミー創設まで』がそれである（単行本刊行は一八七〇年、ただし二五部）。題名にある一五六四年とは、言うまでもなくイヴァン・フォードロフによる「使徒経」刊行の年であるが、著作の中ではさらに、一五世紀半ばのクラコフでの教会スラヴ語による出版にまで遡っている。また、改訂新作では一七二五年を一七六四年の芸術アカデミー創設にまで時代を広げている。そのほか、クレムリン武器庫で発見された、ピョートル大帝に招かれてロシアへ到来してロシアの銅版画史に大きな足跡を残したオランダの版画家アドリアン・シフォネベックとその弟子アレクセイ・ズーボフ関連資料の紹介、一八世紀半ばに科学アカデミーで働いていた一九五名の版画家たちに関する資料、銅版画に関するさまざまな情報、年別・流派別の版画家リストの他、当然ながら今後は木版画に関する記述、また、ルボークに関するИ・М・スネギリョフの仕事への論及、中世ロシアの金属・木工による工芸美術に関するザベリーンの仕事も視野に収めるなどときわめて多様な内容が含まれていた。また、当時続々と発表されていた中世・近世ロシア文化史にまつわる画期的で、精神的かつ新鮮な仕事（А・Е・ヴィクトロフによる中世ロシアの官公庁書類研究

やB・E・ルミャンツェフの一六一―一七世紀モスクワ印刷所に関する研究、П・П・ペカルスキイによるロシア科学アカデミー史やピョートル時代の学問研究史など)にも丹念に目配りを施し、その成果を十分に咀嚼していた。⁽²⁴⁾

その意味において、これは前作の『歴史』以上に新たなタイプの美術史研究であった。ロシア版画史をはじめて構想・素描し、それを多数の一次資料を使って実証・記述した点で、本稿のテーマである民衆版画(ルポーク)に対する関心への移行を物語っている点で、まさしくかれのその後の研究の出発点がここにある重要な仕事であると言える。

この改訂版にたいしてはスターツフも高い評価を与えた。ロシア科学アカデミーより、小ウヴァーロフ賞を受賞したことは前記のとおりである。しかもロヴィンスキイはこの仕事を新たな情報と研究によりさらに増補すべく仕事を継続している。その改訂版原稿は一八九三年にはほぼ完成し、九五年の死の直前の病床で最終校正作業がかれ自身の手でおこなわれた。かれのもっとも忠実な弟子であり、盟友のドミトリイ・ソプロコの手により、『一六一―一九世紀ロシア版画家詳細事典』(全二巻)は一九〇三年に世に出た。⁽²⁵⁾

一八六〇年代に、ロヴィンスキイの美術史家としての仕事、あるいはより正確に言えば、版画史研究に関する仕事は本格的に展開した。

四 『肖像画事典』ほか

一八六〇年代は大改革時代としてロシア社会の大きな転換点であり、ロヴィンスキイはまさにその渦中にあった。ロヴィンスキイは、一八六〇年代の法曹界の大きな変動、一八六四年一月の司法制度改革の実動部隊として活躍し

ていた。一八六四年には法典編纂委員会に加わり、「大綱」の方針の下、起草委員会の裁判所構成法部会のメンバーとなっている。特にモスクワ管区の司法改革には大きな力となった他、仕事の合間には、特に毎週土曜日、日曜日にかかは、モスクワ市内各所にある留置施設や拘置所、中継監獄や梟監獄を監督官や補佐を同行して見て回り、現場の実情につねに関心を失うことがなかった。陪審員制度の導入や体罰廃止などにもかれの影響は大きかったという。

アナトリイ・コーニ（一八四四—一九二七年）は、一九世紀後半からロシア革命後まで法律家として活躍し、アカデミー名誉会員、セナートのメンバーに選ばれた人物である。しかも、劇作家の息子として、同時期の作家、インテリゲンツィアや社会活動家との交流も多く、その回想録は多数の興味深い人物観察を含むものとして名高い。そのコーニは一八六六年にモスクワ検事だったロヴィンスキイの秘書として働き、かれについて多くの文章を残しているが、それによれば、ロヴィンスキイは一八六〇年代の司法改革できわめて精力的に仕事をしたばかりか、その中心的役割を果たしたという。また、ロヴィンスキイは司法の現場においても「裁きの中で、実際のな土壌にあわせつつ、明晰かつ正直に問題を組み立てる勇気を備えていた」人物であった。かれが後輩の裁判官に贈った有名な言葉、「まず何よりも人であれ、その後で官吏であれ」をコーニは引用しながら、リベラルなデモクラートとしてかれの人間性が多くの人々に理解され、信頼されていた、と絶大な共感と敬愛の情をこめてその人柄について書いている。⁽²⁶⁾

その目覚ましい活躍により、かれは一八五三年からモスクワ検事として働いたことはすでに述べた。それに続き一八七〇年までの間、モスクワ控訴院検事長などを歴任した。また、一八六二年秋から翌年にかけて、さらには一八六四年には、ペテルブルグ、モスクワ、その近隣諸県を实地調査し、司法統計資料の収集に全力を費やした。また、進歩的人道主義者としての名声により一八七〇年からはペテルブルグへ移り、最高裁判所刑事破毀部評定官（セナートル）として死ぬまでその地位にあった。その二五年間に扱った裁判決裁は七八二五件を数えたという。

こうした法律家としての仕事と並行して、美術史研究者としての仕事もきわめてエネルギーに継続された。版画の収集とその研究の延長線上で、かれが特に選択・注目したのは肖像画のジャンル、そしてルボークであろう。それらの分野の仕事が一八六〇年代以降に大きく展開されることになる。ロヴィンスキイ図像学（イコノグラフィ）の展開と成立である。

肖像画研究の最初の成果は、一八七二年に出版された二三六ページからなる『ロシア肖像版画事典』である。これが発表された背景には、一九世紀前半から関心が起こり、世紀半ばを境として活発化した肖像画研究をめぐる動きがある。ロシア史・古代協会会長のII・II・ベケトフによる『肖像画集成』（一八二一—二四年、ただし、全四部を刊行する計画だったが、肖像画五〇点を収録した第一部のみが出版）を筆頭として、ロシア肖像版画への関心と需要は高まっていた。一八五一年から二二年間にわたり出版されたラトヴィア生まれの版画家B・Φ・チム「ロシア芸術小新聞」にはリトグラフによる肖像画が多数連載されたし、A・ミュンスター『ロシアの活動家たちの肖像画画廊』（一八六五—六九年）やエルミタージュ館長A・II・ヴァシリチコフ『ロシア肖像画事典』（一八七五年、フランス語）といった仕事が続々と登場しつつあった。ただし、ロヴィンスキイの事典は、かれ自身も認めているとおり、ロシアの版画・肖像画にたいしてロシア国内および西欧の目を向けさせ、「版画市場」を形成させたという効果をもたらしたとはいえ、分量が二三六ページであることから見ても情報源としては不十分であり、意義もさほど高いとは言えなかった。特に一八七〇年代以降は版画市場が急速に拡大し、肖像版画にたいする関心と情報が増大したことから、改訂版の準備は当然必要となっていた。そこで、『モスクワ君主の信頼できる肖像画』（一八八二年刊行、ここにはイヴァン三世、四世、外国・ロシア大使の肖像画ほか四五点の版画が収録、記述されている）を経過的な仕事として発表しながら、肖像画に関する情報の集大成に向かうこととなる。「より完全な、改訂したもの」を求めるのは研究者

の、特に書誌学者の当然かつ不可欠なインテンションとはいえ、ロヴィンスキイの意欲には格別のものがあつた。

『肖像版画詳解事典』（一八八六—一八八九年）はこうして生まれた。全四巻、総計二二〇八ページの大作である。

事典形式を取っているが、配列は人物のアルファベット順に項目を並べ、各項目には、肖像画のオリジナルあるいはタイプの年代順の記述、肖像画の形状（円形、楕円形、四角など、枠・背景の有無）、画法、大きさや寸法、署名、そして可能ならば典拠となつた書物などの情報が盛り込まれたほか、各人物の簡単な生涯記事もここに書かれた。全四巻の内訳は、第一—三巻が人物別事典にあてられ、第四巻は索引、文献典拠、そして解説となつている。

この『事典』が、収録された人物が二千名を数え、検討された肖像画点数が一万点を超えることだけからも、きわめて壮大なスケールとイデーを持つことは容易に理解できるだろう。しかし、たちどころに疑問となるのは誰を取り上げるのか、という選択の問題である。肖像画が描かれるのだからその人物が社会的に十分知られていることは当然だが、それならば対象とする「有名人」とは誰か、どこまでを収録するのか、しないのか。序文においてロヴィンスキイはそれになりたいする一応の回答を与えている。結果として選ばれたのは、歴代のツァーリ、著明な貴族や軍人・廷臣、大使・外交官、芸術家や学者、さらには道化師、才人、農民反乱指導者などだった。外国人でありながらロシアで要職に就いたり居住した人々も含まれたが、その選択基準は必ずしも明確ではない。もっとも、例えばレフォルトやゴルドン、ミューニヒ、バルクライ・デ・トリーリやバグラチオンなど一八一—一九世紀の著明な軍人たちは確実に収められている。²⁷さらには、歴史家のシチェルバトフやタチシチェフ、旅行家・探検家のクラシェニンニコフやクルゼンシュテイン、芸術アカデミー創設者シュバローフ、画家のブリュロフ、キプレンスキイ、建築家のラストレツリ、宮廷道化師バラキレフも、グリボエードフやゴーゴリ、プーシキンもダーリも、ドストエフスキイも立項されている。女性も欠かせないのは当然で、女性史に強い関心があつたロヴィンスキイは、十八世紀以後急速に社会の表層に登場

した女性たちの活躍の証しとして肖像画に特に着目する。貴族の女性たちは言うまでもなく、『エヴェネイ・オネーギン』にも描かれたイストミナ、グリボエードフが歌ったテレシヨヴァ、俳優のトロエポリスカヤなど、芸術アカデミー総裁として活躍したダシユコヴァには特別の興味を示している。そしてプガチヨフやラージン、さらには、一八世紀後半以降の大衆文学のヒーローである「悪漢」ワーニカまでも立項⁽²⁸⁾されている。

項目中に紹介される簡単な人物伝では、その人物の外見・風貌や生活ぶりの中のディテールが同時代人の伝聞・回想からピックアップされて記された。それが、場合によっては信ぴょう性を疑われたとしても、図像学的に見てその人物を知る上で重要であると判断されたならば、それらの資料を活用したとかれは述べる。特にこの最後の指摘は注目すべきである。ロヴィンスキイ自身、こうした事典記述の基本的方針を簡条書きしているが、その最後の項にそのことを特記し、モスクワ古老たち数人からの口頭の伝承によるものであることを誇らし気に認めている。

歴史上の多くの人物の生涯からどのようなディテールに着目し、その資料にもとづいて個人のリーチノスチ（パーソナリティ）を記述していくのか、という問題にたいして、ロヴィンスキイの次の言葉は多くのことを示唆する。

われわれ、図像学者にとって大切なのはエカテリーナ大帝の高雅なポーズの描写ではなく、本物の生き生きとした、品位とともにすべての欠点を備えたエカテリーナである。われわれが知りたいのは、この偉大な女性を取り囲むあらゆるディテールであり、彼女が何時に起き、何時に仕事に向かい、ディナーで何を飲み食べ、夜には何をし、何を着ていたか、どこへ出かけたかである。そのすべてがわれわれには重要で、彼女の個人生活を知ること、インチームな書き付けまでも読みたいし、家にいる彼女の、生き生きとした、賢く、ずるく、おそらくはずばぬけて熱狂的な姿を見たいのである。この生活習慣の細部のごくわずかでも知るだけで、彼女の家庭生活の気軽な

側面がツァーリとしての課題解決には影響をもたらさなかったことを、他のあらゆる「歴史」以上にはっきりと確信できる。そして、この偉大な女性である彼女が新たなロシア国家へ果てしなき愛を持つが故に、私は彼女のことをますます好きになるのである。（『詳解事典』第一巻序）²⁹

最後の部分をロヴィンスキイ自身の本音としてのエカテリーナ評価かどうかは議論が必要であろう。しかし、そのことよりもはるかに重要と思われるのは、その前に記された、衣食住も含めた個人生活のディテールに着目し、メンタリテイの解明をめざすという方向性である。それはそのまま現代の「日常史」「社会史」ないしは「個人生活史」「メンタリテイ史」研究に通じる文章である。じつはこうした問題関心は、十九世紀後半に国家史を中心とした「ロシア史」が構築され、その過程でロシア史学が成立していく一方で、「日曜歴史学」風のロシア文化史が生まれていくことを思い出すならば、ロヴィンスキイのみに特有のものではなかった。先にもあげたザベーリンはじめ、И・Г・プリージョフ、Н・И・コストマロフ、М・И・プイリャーエフらの仕事はそれを明確に物語っている。

この『事典』が多くの好意的反響を呼んだのは当然である。「歴史通報」誌編集者で歴史家のС・Н・シュビンスキイはロヴィンスキイにたいして、『事典』刊行によって、あなたは永遠の記念碑を打ち立て、あなたの名前はすべての歴史愛好者の世代を超えた感謝と敬愛をもって記憶されるでしょう」と書き送っている。さらに、二〇世紀初頭に美術批評家として絶大な影響力を誇ったアレクサンドル・ベヌアは、この仕事に対して次のように評している。「本書（大きな説得力ある教養に満ち溢れた）は、"アポロンの微笑み"ならびにクリオの悲しい魅力の双方の照射をはじめもたらしてくれた。目録の性格を持つにもかかわらず、退屈で堪え難くないどころか、面白く魅惑的なことはもっとも興奮させる長編小説のようである。（略）本事典は、公衆の名高い悪趣味にいささかも譲ることがないに

もかわならず、幾多の読者を生み、以後、その読者の多くは古物の熱心な収集家かその研究者となった⁽³⁰⁾」

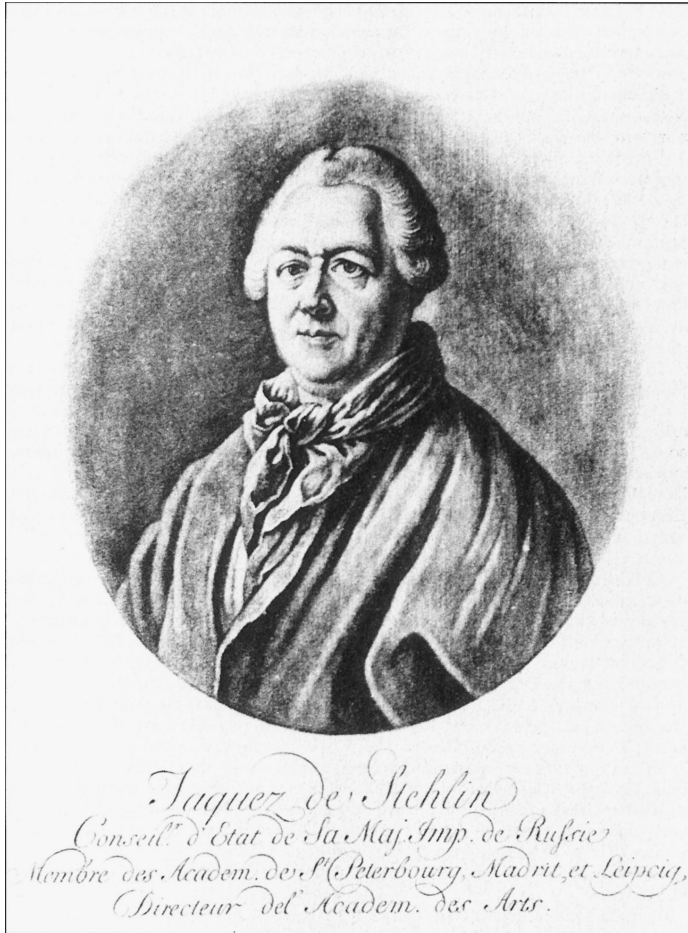
ロヴィンスキイによるロシア・イコノグラフィ研究の全貌は、ルボークを除けば、かくして示された。一八八四年から九〇年まで全一二冊の形でまとめられた『ロシア・イコノグラフィ資料』はその集大成であり、ここには、一八七〇年代から構想されたかれのロシア史イコノグラフィの一端が伺えるのである。この図録集成には、一六一―一八世紀の大貴族、ツァーリ、総主教、国家的活動家の肖像画五二七点のほか、衣装、諸都市の景観、風刺画などのファクシミリ版の図像が収められ、それぞれに参考情報が付せられている。各冊には百点ずつが収録されたが、さらに各テーマ別に体系化した形で個別の巻として出版する計画もあった(一部のみ、『風刺画集』が一八九三年に刊行された)。もう一つの大きな仕事として、現代の西洋絵画研究においても広く知られるのがレンブラント作品の収集とそのカタログ作成である。ロヴィンスキイが法律家として得た報酬の多くを注ぎ込んで、四十年以上にわたり購入したレンブラントのエッチングは六一九点、レンブラント派版画は三四九点の合計九六八枚にのぼる。それぞれカタログが出版され(一八九〇年・全一卷・図版三巻、一八九四年・図版二巻)、今なおレンブラント展の折りにはかならず参照される基本文献である。

かれのこのような美術史学研究が高い評価を得たことは容易に理解できる。一八七〇年に芸術アカデミー名誉会員、一八八一年にロシア科学アカデミー準会員に選ばれたほか、一八八三年には科学アカデミー名誉会員、帝室公共図書館名誉会員となっている。その一方で、セナート破毀部評定官(セナートル)として、死ぬまで法律家としての仕事に邁進したことはすでに述べた。

五 『ロシア民衆絵画』の上梓

『ロシア民衆絵画』全五巻（一八八二年）と図録七ならびに四冊（一八九一―九三年）はロヴィンスキイによるルボーク学の集大成である。その意義の大きさについては、ルボーク研究や美術史学においては言うまでもなく、歴史学、文学研究、民俗学、演劇学をはじめとする関連分野で広く知られている。いや、およそロシア文化に関わる事を調査する上で絶対に欠かすことのできない、現代にあっても圧倒的価値を失わぬ基本文献であると考えてよい。したがってその全容と意義についてはあらためて述べるまでもないかもしれないが、筆者自身の関心と多少の独断でもって言うならば、ルボーク研究はかれの関心と、そして「思想」をもっとも明確に示すものである。

むろん、ロヴィンスキイ以前ならびに同時代にも、ルボークへの関心と研究の萌芽はあった。もっとも早い例はヤコフ・シュテリンによるルボーク購入である。むろん、ルボークは一八世紀初頭から広く販売されていたが、このシュテリンは購入者として名前が知られているだけでなく、この民間の作品に価値を見出した、おそらくは最初の人物であろう。一七〇九年にドイツで生まれ、一七三五年から八五年に亡くなるまでの半世紀をロシアで暮らしたかれはロシア科学アカデミー、芸術アカデミーはじめ多くの機関でロシアの科学・芸術振興のために働いた人物である。絵画・音楽・バレエを中心とするかれの論考は今なおロシア芸術史の上で貴重な仕事として、その意義を失わないとされる。³¹ そのかれが一七六六年、モスクワのクレムリンの一角スパ斯塔近くで売られていたルボークに目を留めた。「高尚な」絵画作品ならば十分興味の対象とされたはずであり、どうしてルボークという民衆の素朴な作品に注目し



最初のルボーク収集家 ヤコフ・ヤコヴレヴィチ・シュテリン

たのか。やはりエキゾチズムによるものなのか、それともイコン以外には当時のロシアにはいまだ「美術品」がほとんどなかったために珍しかったのか、シュテリン自身は何も語っていないが、十分考察の価値がある。かれがルボークを何点購入したのかは不明だが、その中に「鼠による猫の埋葬」をはじめとした何点ものルボーク代表作があったこと、かれ以前には収集がないことなどから、かれの購入はルボーク収集・研究史において大きな事件として記憶されている。このシュテリンの後を追うかのように、一七七〇年代にはロシア貴族で官吏のA・B・オルスフィエフ（一七二一—一八四年）が二千五百点以上のルボーク・コレクションを残している（西欧版画も含めると八万点にのぼるが、一八一二年のモスクワ大火で焼失、一部残ったルボークがシチェドリン図書館収蔵を経てロヴィンスキイの手へと渡った）。

こうした収集がおこなわれたことは、研究の開始をもたらす。一九世紀前半、現代的な視点からすれば、いまだ好事家的な関心の枠内であったとはいえ、ルボークを「真面目な」興味と研究対象として論じたのはИ・М・スネギリョフである。かれの名前は「ルボーク」なる言葉を民衆版画の意味で定着させたことで研究史に残る。一八二二年に「ロシア文学愛好者協会」の会場で発表され、同年に雑誌「祖国雑記」（И・И・スヴィニン編）に発表されたスネギリョフの論文「ロシアの民衆画廊、あるいはルボーク」がそれである。ほぼ同時期に、かれ以外にもM・マカロフやブルーレなどといった人物がルボークにたいして関心を示していたとはいえ、ごく短かな言及に留まっていた。⁽³²⁾「ルボーク絵」「ルボーク的作品」というタームを特定の版画作品を認知するために使用し、ルボーク研究の端緒を開いた功績は、やはりスネギリョフに帰すべきであろう。

彼は一七九三年生まれ、中世史・考古学・民族（俗）学、など幅広い分野に関心を持ち、スラヴ派に共鳴するモスクワ大学教授として「官製ナロードノスチ」理論の支持者として活躍した人物である。⁽³³⁾このスネギリョフが文字通り

最初の研究対象として選択したのがルボークであった。一八二〇年代後半から父親と同じくモスクワ検閲委員会のメンバーとなり、ルボーク検閲官として活躍したけれど、そのルボーク論は、のちの「官製ナロードノスチ」理論へ傾斜する以前の、ある意味でフォークカルチュアの具体的現象にたいするストレートな問題関心の在り方をはっきりと示すものとして注目すべきである。一八二二年に発表された論文「ロシアの民衆画廊、あるいはルボーク」は、全体で二三ページの小さなものだが、次の二点を明確に指摘したことで重要な意義を持つ。すなわち、ルボークを特にその内容面から研究することは、ロシア民族の特性を考える上できわめて役立つことから、この版画の収集と記述をおこない、また、ロシア人にたいする影響を示す事実を集めるべきであるという点、もう一点は、この民衆の作品は出版の特殊な一形式として研究すべきであり、そのために起源、出版史、流布と制作方法などを明らかにすべきであるというものである。一八二〇年代という時点で考えるならば、彼の発言はきわめてオリジナルで、時代の先を示唆するものだった。ただし、これはあくまでも、ルボーク研究への呼び掛けであり、問題提起でしかなかった。自ら提起したこれらの問題にたいして、スネギリョフが研究を進め、その成果たる回答を与えたのは、約四〇年後の一八六一年に発表された『モスクワ世界におけるロシア人のルボーク画』と題される一三〇ページを越えるモノグラフによってである。

一八二〇年代にスネギリョフによって端緒を与えられた問題設定は、一八六〇年代の時点によくやく広く受け入れられ、今や共通認識となりつつあった。ルボークが実証研究の対象として認められる状況が作られていたのである。A・A・コトリャレフスキイの論文「民衆のルボーク画による昔のロシアの生活への見解」（一八五六年）、Φ・И・ブスラーエフによる論文「ロシアの民衆本とルボーク出版」（一八六一年、これはスネギリョフのモノグラフへの書評として書かれた）、また、実際のルボーク工房の支配人であったИ・А・ゴリュシエフの『画集』や論文

「民衆のルボーク古版画」（一八六九年）などが相次いで発表されていた。また、ポゴージンやスターソフといったロヴィンスキイにもっとも身近な場所にいた人々がルボークへ強い関心を示し、収集と研究の必要性を訴えていたし、作家のH・A・ネクラソフをはじめとした文学者やインテリゲンツィヤの中にもルボークの重要性を理解し、ナロードの啓蒙に必要なメディアであると考える人々がいたことも忘れてはならない。

ロヴィンスキイの畢生の仕事である『ロシア民衆絵画』は、ルボークにたいするこうした時代環境と知的・学問的要請の下で登場し、実証主義研究としてのルボーク学を確立したものである。その意味でロヴィンスキイは、まさしく登場すべく登場した。ただし、そうした時代精神を前提にしながら、やはりロヴィンスキイ個人のルボーク研究への道の選択にとって決定的要因となったポゴージンとの交流を忘れるべきではない。先に述べたように、ロヴィンスキイの法学校入学を勧めたポゴージンは、その『日記』に、ロヴィンスキイがかれの版画コレクション（おそらく西欧の）を見せたが、そうした収集は他にも多くの人々がやっているからロシアの版画を集めるようアドバイスをしたことを記している³⁴。さらに、一八四五年にポゴージンは、自分が最近入手し、所有していた上記ヤコフ・シュテリンの関連文書の整理を若きロヴィンスキイに手伝わせていること、そして、かれはそれをもとにルボークに関する最初の覚え書きを残していることが判明している。ポゴージンが、ロヴィンスキイをルボーク研究へと向かわせた人物であることはほぼ間違いないであろう。

簡単に『ロシア民衆絵画』の概略を述べておこう。この著書は、かれの二五年以上におよぶ研鑽の成果として、『帝室ロシア科学アカデミー・ロシア語ならびにロシア文学部門論文集』第二七―三一卷として一八八一年に刊行された。ただし、この五冊は解説書であり、これとは別に、一七八〇点を収めた図版の巻として全七ならびに四冊も刊行された。全五巻の解説版はそれぞれ、五〇九、五三〇、七五〇、七八八、五六七ページ、総計で二八八〇ページで

ある。第三巻までが個々の作品の記述にあてられ、第四巻は注釈と補遺、第五巻「結論」の最終巻は、ルボーク製作についての情報、民衆生活における意義、ルボークに関連する歴史・文化的事象について述べられている。全体で四千七百点のルボーク作品が記述され、ヴァリアントと再版作品も含めると約八千点が取り上げられ、各作品に関する詳細な情報（絵ならびに文字テキストの存在するヴァリアント、それぞれの主題の絵の数、判明する限りの絵師・摺師名、出版年代・場所、技法、収集リスト、文字出版の典拠など）が記述されるのである。⁽³⁵⁾

『民衆絵画』がどのような過程を経て完成されたか、についてはこれまでほとんど知ることができなかった。だが、近年、フロモフによるロヴィンスキイ関連のアーカイヴ調査によっていくつかの事実が解明されている。また、それを補足する形の手がかりとして、先に名をあげたイヴァン・A・ゴリシエフ（一八三八―一九六年）との交流の事実があり、この両者の間で交わされた書簡によってそれを知ることができる。

一八七四年三月二〇日にA・H・プイピンがコトリャレフスキイに送った手紙には、「とても興味深い仕事が始まっています。その実例が、テキストならびにルボークのいくつかの絵を出版しようというロヴィンスキイの事業です。かれは復活祭「三月三十一日―引用者」後に出版に取りかかります。その出版を大きな好奇心でもって待っています」とある。これが『ロシア民衆絵画』であることは当然であろう。事実、ロヴィンスキイはその出版に着手し、五月九日の手紙で「一〇リスト」「一リストとは本の分量単位で、全紙一枚が一六ページ―引用者」は印刷所に渡した」と記している。

だが、徹底主義者がそれで満足できるわけがない。新たな資料の探索が執筆と並行しておこなわれるが、それが刊行を遅らせることとなる。ゴリシエフとの情報交換に関しては以下に述べるが、この他に、例えばモスクワの商人

バトイシェフの四百点のコレクション（一八一―一九世紀初頭）を新たに発見したことなどが予想外の事件である。一八七五年三月のロヴィンスキイ書簡には「第一巻はタイプ打ちが終わるところです。第二巻を始めました」とある。

「第一巻の第一〇リストに入りました。第一巻は春に終わっているのに」（同年末）。第二巻の段階でかれは、本全体の分量についての計画が十分でなかったとして、出版計画を変更している。それによれば、一八七六年に全部を出版するというものだが、これもさらに修正せざるをえなくなった。一八七六年秋の段階で、第三巻の最初の部分のみが組版となっていた。しかもそれで、その後の出版がうまく進行していったわけではなかった。そこには、ロヴィンスキイ自身の、ルボークの解説執筆において、作品の源泉をさらに追求したいというアカデミックなインセンティブに加えて、同時代の学問動向とが作用していた。後者について詳細に述べる余裕はないが、一言で言うならばそれは、一八六〇―七〇年代に流布していた、スラヴ文化のルーツをサンスクリットに求めるという、当時の歴史言語学の影響下にあった理論的関心である。そのことが、ロヴィンスキイに調査旅行をさせることとなる。日程は一八七五年三月一日から九月二八日までの約半年間だった。ロシア・ルボークの題材がどこから来たのか、そもそもロシア「固有」なのか、ルーツ探しの調査の先はインド、中国、そして日本にまで及び、少なくとも「東方」のルボークに関する多数の情報を入手することができた。ルボーク題材のサンスクリット起源の論証はできなかつたとはいえ、この調査によって解説部分を書ける態勢となった。

第四巻「注釈と補遺」に取りかかったのは一八七七年のことである。仕事は、おそらく「本職」の忙しさもあって、なかなかかどらなかつた。一八七九年二月二五日の手紙には「仕事は進み、一月一日までには第三巻の注釈が出来る上がりますし、第一巻の序文は下書きとしてすでに書かれています。二月末から印刷に入ります」とあるほか、一八八〇年九月二日付けで「今日、第二七リストを印刷に入れました。さらに、二三リストが残っていますが、一月



ヴラヂーミル県の「名士」И. А. ゴルィシェフ

にすべて終えるお約束をします。ただただ牢獄のような仕事をしてい⁽³⁶⁾ます。同年十二月、ロヴィンスキイは第四巻の執筆を終了している。かれの畢生の著作が完成し、世に出るのは一八八一年の夏のことだった。この解説の全五巻の準備と並行して、一八八一年から刊行を開始したのが図録全四冊である。その準備作業は一八八〇年一月一日に終了していたが、やはり図版出版をめぐる困難さ故であろうが、最終巻が刊行されたのは一八九三年である。

『ロシア民衆絵画』の完成に関して、特に別冊の図録を準備する過程を知る上で貴重な事実の一つは、先に名をあげたイヴァン・A・ゴルィ

シエフ（一八三八―一九六年）との交流である。両者の間で交わされた書簡によってその具体的内容を知ることができる。ゴリシシエフは、モスクワ北東に位置するヴラザーミル県のムスチョーラ村で農奴の子供に生まれ、ルボーク制作をはじめとする地域の産業を振興させた、土地の名士で郷土史家として知られる人物である。ヴラザーミル県は農民が毎年行商人として出稼ぎに行く習慣が古くから根付いていた土地である。かれらが商う商品としては更紗、キャラク、皮、茶、針と糸、紅、携帯用アイコンなどだったが、中でもルボークと本は有利な商品として人気があった。特に同県のムスチョーラ村はクリヤジマ川のほとりに位置する大村で、昔からアイコン画家が活躍したほか、刺繍や銀細工、そして行商人で知られていた。パーニン伯爵家の農奴を主な住民とするこの村では、もともとここにあったアイコン塗りの伝統から一八世紀以来ルボークが作られていた。この伝統を継承する形で、一八四〇年（一八四四年とも）、農奴のA・ゴリシシエフがルボークの色づけの注文を受け、自分の娘も含めて女性たちとその仕事をおこなわせた。最盛期には村内で一八二戸、三〇〇人以上がそれに従事していたという。かれの息子イヴァンは一八三八年六月、そうした土地の文化的風土の中で生まれた。村の学校で学んだ後、モスクワへ上京し、ストロガノフ伯爵の画学校で金属版画、リトグラフなどの技術を身に付け、村へ戻る。父親の事業を受け継ぐべく、一八五八年にかれは県内で最初のルボーク印刷用リトグラフ工房を開いた。父の名を冠したこのアトリエ（一八六二年から学校）では、以前と同様に、女性たちがルボークに彩色する作業をおこなっていた。ルボークの制作者＝事業者のかれがルボークの収集・研究に携わったのは、ある意味で当然だろう。ロシアで最初のルボーク画集の刊行（一八七〇年）の他、ルボーク研究を多くの論文にまとめている。³⁷⁾

ルボークの制作現場と実際の作品に通じ、かつ研究対象ともしていたゴリシシエフが、同時代人で、しかも今やルボーク研究に熱狂するロヴィンスキイの視野に入らないことはありえなかった。一八七〇年代半ばから後者の死の直

前までの間、二人はかなり頻繁に手紙を交換している。以下に、それを見てみよう。

ロヴィンスキイが送った一八七四年一月の手紙は、二人の文通のおそらく最初のものであろう。文末に、当時のロヴィンスキイの住所（サンクト・ペテルブルグ、シュパレルナヤ通り、シネブリュホフの家、セナートル・ロヴィンスキイ宛）を書いているからである。その手紙の内容は、ゴライシエフが発表したルボークに関する小冊子ならば昔のプリアニク「スパイス入り糖蜜菓子」の図録を一部送ってほしい、お金は指示通りの金額を送る、というものである。

ゴライシエフが著した「ルボークに関する小冊子」が具体的に何を指していたのか手紙の文面からは不明である。ただし、一八七四年の時点までに、かれは『ヴラデーミル県報』『ヴラデーミル県統計委員会年鑑』などにルボークに関するものも含めて多くの文章を発表しており、それらの文章の中には抜き刷りとして個別に出版されたものもあることから、⁽³⁹⁾そうしたものをロヴィンスキイは欲しがったのかもしれない。いずれにしても、ゴライシエフの返事にはそのことへの言及がない。

プリアニクの絵にロヴィンスキイが興味をいだいたのは偶然ではない。この菓子を木型に入れて作る際、型に単純な図柄や文様を彫り込むので、その絵がルボークの図柄や文様と通じることが多く、相互の影響関係が重要な問題となるためである。⁽⁴⁰⁾その図録とは、『ヴラデーミル県ヴァズニキー郡の古いプリアニク板の図録』（一八七四年、ムスチョーラ発行）のことであり、全七ページ（ただし解説文、図は二〇点、部数五〇とある。稀覯本であるにもかかわらず、やはりルボーク研究には不可欠な仕事であるからこそロヴィンスキイは所望したにちがいない）。

同じ一一月付け（日付けなし）のロヴィンスキイの礼状から、代金四ルーブリが同封されたこと、かれの願いは聞き入れられ、プリアニクの図録がただちに送付されたことがわかる。お礼として『肖像版画事典』（一八七二年）を

贈るといふ手紙だが、そこには、一般には販売されなかつた貴重な象牙紙版のもの、という気遣いも忘れられていない。さらにこの手紙の後半部分は、ルボーク研究の出版計画についての言及が見られるので重要である。

現在、ロシアのルボーク画に関する大きな本を準備しています。それは百リストは越えないでしょう。この本に添える形で、古いルボーク（二百点以上の木版画が必要です）から寸分違わぬコピーの図録を作るつもりです。若干の部数（全部で二百部を考えているので、例えば五〇部）には、あなたの出版の場合とまったく同じ形式で、プリヤニク図の複製を付けてみたくになりました。今のところは思いつきにすぎません。図録の出版は一八七五年の末以降になるのですから。ところで、図録に使える銅版原板は残っていますか⁽⁴⁾

ここで言及されている「大きな本」が『ロシア民衆絵画』のことであるのは間違いない。完成品は二八八〇ページとなつたから、ここで書かれた予定枚数はかなり超過したことになる。図録のアイディアはもとからロヴィンスキイの頭にはあつたが、プリヤニクの絵の収録は新たな発見である。さらに、銅版画の原板を要求していることも、何とか図録を充実させたいといふかれの強い気持ちの現れであろう。ゴリュシェフの返事は二月一日付けで、手紙と代金、そして『肖像画事典』を受け取つたことが記されている。特に、『肖像版画事典』というプレゼントにたいしては、「どのように感謝してよいかわかりません。と申しますのも、この土地ではこうした参考書は手に入れるだけでなく、見ることさえできないほど貴重なものだからです」と書いている。ただし、その直後には、『ロシア版画家と作品』（二八七〇年）は、すでにB・E・ルミヤンツェフから贈られて手元にあることを書いているから、なかなかゴリュシェフもあななどれない。プリヤニクの図を収録したいといふ希望については、喜んで全面的協力するのを惜しまない、

ただし、「銅版の原板は、しばらく私が借りました（それには少しお金を払いました）ので、印刷終了後に持ち主たちに返さねばなりません」と書いている。さらに、全体的に見て、銅版ルポークの原板がほとんど残っていないし、古いルポーク絵それ自体もごくまれにしか見られぬこと、そうした状況は検閲の結果であること、また、自分が、モスクワの旧ロギノフ工房から入手した原板、若干の宗教的内容のルポーク、二枚ものの「鼠たちが猫を埋葬する」などを所有していることなどを知らせている。

ロヴィンスキイの反応は迅速で、同じ一二月である。「あなたの手元にある、銅版原板（ロギノフから購入した）と木版画原板から摺ったものを一枚ずつ、代金は払いますから、送ってもらえませんか。（略）プリヤニクの板については、図録が印刷段階となったときに手紙をします」。これにたいする直接の返事は発見されていない。一八七七、七八年、両者の短かな手紙のやりとりは続くが、ロヴィンスキイのルポーク研究に直接結びつくと思われる記事は見られない。

一八八〇年は、『ロシア民衆版画』本文と図録の出版準備が佳境に入ったためか、両者の文通に動きがある。同年一月二二日付けのロヴィンスキイの書簡には、「あなたが送ってくれた小冊子に印刷されている版画二枚を私のルポーク図録に収録させてもらえませんか」とある。「もしも承諾していただけるならば、こちらで石版に移し印刷するため、リトグラフ転写紙に摺ったものを送ってください。同様に、あなたが別の二つの小冊子に掲載した、昔の木版から摺ったもの、それに大判の三枚のプリヤニク図からのものがあればよいのですが」。一週間後のゴリシシェフの返事は、ロヴィンスキイの希望には必ずしもそえないことを記している。木版画原板からの印刷に関しては問題がないが、それ以外については、諸般の事情から十分な便宜を図れないというのである。特に、ロヴィンスキイの念頭にあった、ゴリシシェフが発表した「小冊子に印刷された版画二枚」とは、「キリストの磔」と「赤紫の棺に座るイエ

ス・キリスト」のことだが、その原板はもはや自分の所にはない、かれがそれを一時期借用したムスチョーラの古物商が、すでにモスクワへ売却したからだ、という。また、プリヤニクの木型についても、かつてヴァズニキーやムスチョーラ村などで一時借りて、印刷・出版後に返却していたが、それも今は二個しか入手できず、大判の木型についても持ち主に戻して手元がないので、「あなたの希望を満足させることができない」と書いている。ただし、ゴルィシェフの文面は誠実さにあふれており、それ以後も二人の文通は細々ながらも続いている。⁽⁴⁾

一八八三年九月一四日付けの手紙でロヴィンスキイは、完成した『ロシア民衆絵画』を贈ったことを知らせている。だが、返事がないので、二週間後の九月二四日にロヴィンスキイは再度、そのことを書き送っている。受け取りの返事は一〇月七日付けで書かれているが、それによれば前日の一〇月六日に「重い郵便物として」受け取ったとある。当時の郵便事情に加え、全五冊の大荷物だから時間がかかったはずで、ロヴィンスキイは少々せっかちだったのかも知れない。もっとも、生き急ぐかれであり、畢生の仕事であるから、かれの心持ちも十二分なほどに理解できる。

『民衆絵画』の意義の大きさは、四半世紀以上にわたる収集と研究の成果であるということだけから見ても十分にはかり知ることができる。その完成のためにかれの調査は入念におこなわれた。ルボークのルーツを東方にまで求めて中国、インド、さらに日本を訪問したことはすべに述べた。⁽⁴³⁾この他にかれが足を伸ばした先は、ロシア国内やヨーロッパ各国は当然のことだが、クリミア、ザカフカジエ、ソロフキ、トルクメン、ヒヴァ、ブハラ、トルコ、アテネ、アルジェリア、モロッコ、エジプト、エルサレム、セイロン、ジャワ、アメリカなど実に精力的に調査をおこなっている。そこには、ルボークに向けたかれの執念が明確に浮かんでくる。

従来の美術史研究では十分に視野に入っていない歴史、習俗、法制度、音楽・演劇・文学、フォークロアなどの広

範な分野の資料を渉猟して構想され、完成したのが、このルポーク学の金字塔だった。収集のスケール、カバーした領域と視野、そして徹底した一九世紀的な実証主義方法の貫徹の点で、現代にあってもまさしくルポーク研究の古典として高く評価されるものである。ロヴィンスキイ死後の一九〇〇年には、かれの弟子Ⅱ盟友であり、夭折した研究者H・Ⅱ・ソプロコが編纂した一巻の簡略版『ロシア民衆絵画』（三四二ページ）も刊行されている。全五巻の原著と図録が大部で、しかも少数部数しか刊行されず、書誌的にも稀覯本であったから、このソプロコ版はきわめて貴重である（西欧でリプリント版が刊行された他、二〇〇二年にロシアでもリプリント版が出版されている）。

たびたびロヴィンスキイの仕事の最大の理解者として登場することとなるスターソフは、科学アカデミーのウヴァーロフ賞受賞のための推薦文の中で、次のように記した。「ロヴィンスキイ氏の今回の出版は、かれがこれまで世に出した著作の中でもっとも成熟した、完全で、不動のものである。それはわれわれの歴史・芸術学にとって限りなく役立つばかりか、大きな誇りでもある」。今回の受賞は大ウヴァーロフ賞であった。

『ロシア民衆絵画』には、二〇世紀初頭にアヴァンギャルド芸術家がルポークに「熱狂」したことの先駆けとなるような予兆の痕跡はまったく見られない。このことは、たんにロヴィンスキイが二〇世紀突入直前に亡くなったという事実や、まず何よりも素材としてのルポーク収集に研究の出発点を置いたことのみで説明はできない。また、かれの方法論の基本が一九世紀的な実証主義に依拠した「アカデミックな美術史」を志向することにあっただけでもない。それは、かれ自身のルポーク認識の問題であろう。

ルポークにたいするかれのスタンスは、簡単に言えば一九世紀的な芸術観に基づくものである。アイコン、肖像画、そしてレンブラントをはじめとしてみなが収集・研究した美術作品と比較した時、かれはルポークに芸術的価値を認

めてはいなかった。そのことがはっきりと物語るように、ロシアで一九世紀後半に定式化していた芸術観とそれによって構想された美術史研究の枠から外れて出ることにはロヴィンスキイにはできなかったと言える。

そうだとすれば、かれのルボーク学確立の意義はどこに見出されるのだろうか。そのために三つの点を指摘しておきたい。

まず第一に、『民衆絵画』の完成がその後の現代にまで及ぶルボーク研究にとって最大の「古典」として位置づけられるという点である。このことには、一九世紀的な実証主義的美術史の研究方法に貫かれているという問題が含まれるのは当然である。さらにその背後には、これも一九世紀的な絵画観・芸術観が潜んでいることはすでに述べた。しかし、何よりもまず、実証主義が構築されなければならなかった。特に、ルボークという、ロヴィンスキイの時代には「俗悪な絵・版画」のレッテルが固定し、一部の好事家の趣味対象でしかなかった作品にたいして必要だった。ようやく形が整ったばかりの美術史学⁽⁴⁾のオーソドックスな理論と方法を、画家の名前が知れる作品自体も著名な絵画にたいしてではなく、作者名不詳で、技法的にも、主題的にも「素朴な」ルボークにたいして適用したことは、まさしくかれとその仕事のオリジナリティそのものである。著作のタイトルにルボークという言葉ではなく、「民衆絵画」と宣言されていることは、そうしたかれの自負を物語るものである。しかも、より重要なことは、ロヴィンスキイの一九世紀的な実証主義それ自体が現代にあっても、大きな価値を有し、部分的には十分通用する点である。かれの比較的単純で図式的な風刺論的ルボーク観の是非を別にすれば、テキストの記述方法と実証主義のあり方についてわれわれはロヴィンスキイを完全に凌駕できるものを今手に持っていないからである。

第二は、現代の観点からすれば、ルボークを狭義の美術史から解放して、学際的な文化史研究に方向づけたことである。一九世紀後半に「日曜歴史家」と呼びうる習俗史家たちが登場し、ロヴィンスキイの考え方もそこに含まれ

るのではないか、についてはすでに記した。かれがルポークの価値を美術・芸術的な部分ではなく、むしろ「過去の生活史資料」としての側面に求めていることはその根拠となるであろう。むろん、そこには一九世紀後半に歴史学のみならず、広く人文・社会研究全体で主流であった「ヒストリズム」の影響があることは見逃せない。だが、ロヴィンスキイはそれを狭義の美術史研究に適応させただけでなく、図像学にまでそれを広げたのだった。

第三番目は、かれのルポーク研究が一八六〇年代以後の「時代精神」を体現する点である。その時代がロシア帝国社会にとって大きな転換期であったことからすれば、その中でナロードのあり方とその急激な変貌は同時代にあって大きな議論的となったはずである。一方で、ナロードニキ運動をはじめとした社会運動が大きく展開されていく中、ナロードの文化に「目覚める」人々が多数登場した。一部に、流刑地などで運動から「転向」した人々も含まれながら、かれらは民衆・民俗文化の資料収集に没頭していった。民衆文化の「発見」であり、「ロシア民俗学の黄金期」がここに到来するのだが、それは既製のアカデミズムとはまったく異なった地点から出発していたはずである。ロヴィンスキイは、まったくの在野で資料を収集した人々とは異なっていたものの、ナロードの文化への透徹したまなざしを持っていた点ではまさしく時代を共有していた。⁽⁴⁵⁾

ロシア語辞書の編纂者として知られるダリーは、ロヴィンスキイとおそらく出会ったことはなかったと思われるが、ダリーが集めた膨大な民衆文化資料の中から、昔話テキストはアフアナシエフへ、民謡はピョートル・クレエフスキイへ、そしてルポークはシチュドリン図書館収蔵を経てロヴィンスキイの手元に送られた。⁽⁴⁶⁾この事実だけでも、一八六〇年代の民衆文化発見のネットワークの大きさをうかがわせるに十分である。

六 その死

かれの家庭生活に関して、知られることはさほど多くない。妻のリーヂヤ・アレクサンドロヴナ・ヴォルチャネツカヤとの間に一八八一年に一人娘を授かっている。この娘エカテリーナは成長後ヴォルチャネツカヤ・ロヴィンスキイの名で児童文学作家、詩人、翻訳家として活躍し、一九二〇年にはB・Я・ブリュースフにより創設されたばかりの詩人同盟に参加し、B・П・パステルナークやB・И・イヴァノフらとともにその幹部会メンバーとなった。

有能な法律家として社会的に広く知られ、大枚をはたいて多数の美術品や書物を購入した割には（いや、購入したからこそ）、かれの生活そのものはごく質素だった。モスクワでの住まいは、アルバート通りから南に下りた大ヴァシリエフスキ横町にあるモギリツィのウスペーニエ教会（現存するが、一九三三年に閉鎖）向かいの母親の家で、その中二階の二部屋、ペテルブルグでは、一八七一年のモスクワからの引越し以後はシュパレルナヤ通り六番地のアパート一五号、一八八六年からはヴァシリエフスキ島の第四通り四三番地の小さな一戸建てであった。⁽⁴⁾

質素な生活ぶりについては多くの同時代人が証言するとおりである。「かれの生活環境で、私の記憶に残るものと言えば、膨大な美術史の本と版画入りのケース以外には何もない」と書いているのはザベーリンである。コーニによれば、「中背で肩広、最初赤く、後に灰色の巻いた顎ヒゲをし、きらきらした目は知性に溢れ、いつも動き回り、病気の時以外は馬車には乗らず、生活は素朴そのもので、服装も質素、貧しいと言わなければならない」。

ロヴィンスキイは長らく重い膀胱結石症を煩っており、ドイツで手術を受けた。手術そのものはうまくいったが、その後、さらに仕事でフランスへ向かう蛮行がもとで、かれは一八九五年六月一日、ドイツのフランクフルト^{II}ア

ン・マイン近くの町カッセル近郊の静養地ヴィルドウンゲンで死去した。七〇歳だった。かれは自分の体調を自覚していて、最期を覚悟していた様子があるが、それでもかれの仕事への熱情と決意は覚めなかった。手術後の静養で、五月にヴィルドウルゲンへ移動したかれは、友人のII・A・エフレモフへ次のような手紙をしたためていたからである。「自分のことについて言えば、完全に復調しました。だから、医師が病気になってもさほど悲しくありません。おそろく、かれの指示がなくとも、もう一年は大丈夫でしょう。ヴァン・オスタドに関する私の仕事は順調です。ここから仕事でパリとロンドンに行き、一八二六日はそこに滞在します」。

ロヴィンスキイの遺骸はロシアへ搬送され、同六月二一日にモスクワの聖ヴァシリイ・ケサリイスキイ教会での葬儀の後、自分の村があったモスクワ近郊セートニのスパス教会墓地(リャビノヴァ通り一八番地)の、友人アフシヤル・モフの傍らに埋葬された。モスクワ中心から西南西に位置し、その名前がモスクワ川支流セートニ川から取られたであろうこの村は一八五一年にかれが手に入れたもので、かれはこの場所をとっても気に入っていたという。ここでの趣味は、自らの手で植えた花で屋敷の土地をいっぱいにし、夜には、これも自ら調査した火薬で花火を上げることだったという(死後、かれのもう一つの傑作である『ロシア花火史研究』が刊行されている)。そこは当時、ロヴィンスキイの時代には、おそろくはモスクワ近郊の落ち着いた田園風景に囲まれていたはずだが、今は完全に市内となり、地下鉄の駅クンツェヴォも近くにある。ただし、ロヴィンスキイ自身の墓は見出せない(ただし、埋葬場所はスパス教会の後陣近くという)。

死去の知らせを電報や新聞で知ったザバーリンは、同月一七日にモスクワに戻る遺体を迎え、トヴェルスカヤ通りの教会でおこなわれる葬式に出席しようとしたが、予定の列車には遺体に乗っていなかった。方々に尋ねたが、だめで、新聞社に問い合わせると、翌一八日に列車は来る、葬式は別に知らせせず、との回答なので、その晩はモスクワ

で泊まったが、翌日も遺体は来なかった、と「日記」に記している。だが、同「日記」には二一日におこなわれた葬儀のことが記載されていないことから見て、かれの出席はかなわなかったのだろうか。そもそもそんなことがあるのか、少々不思議でもある。

ロヴィンスキイが集めた膨大なコレクションは、周到に用意されていたかれ自身の遺言どおりに、その行く先に収められた。レンブラント作品はエルミタージュ、ロシアものの版画とリトグラフ肖像画（三万五千点、ルボークはその中の三千点以上）と絵画はルミャンツェフ美術館（一九二四年からモスクワ国立芸術史博物館、コレクションはプーシキン記念国立絵画美術館へ移管）、西欧の肖像画（五万点）はシチェドリン図書館、版画銅板や版木は芸術アカデミー、そして蔵書（二六二三巻一六一七点）は母校である法律学校へ、という具合である。また、現金四万ルーブルは若い芸術史研究者あるいは芸術家の作品制作への奨励金、セートニ村のかれの屋敷はモスクワ大学へ、ペテルブルグの家は妻へ、二万六千ルーブリがモスクワのセートニ村小学校の建設と維持のため、さらには、この金額の一部は、ナロードのための学問的な図版入り著作の報奨として毎年供出されること、という一項も遺言にあった。

かれの死後、ロヴィンスキイを記念したミュージアムの開設が着手されたことがあった。生前にかれ自身もそのことを望んでいたふしがあり、蔵書の寄贈はそれを実現するための布石であったかもしれない。死んでから一五年後の一九一〇年、帝立法学校内にミュージアムが置かれた。しかし、当時の学校上層部はロヴィンスキイにたいしてきわめて冷たく、ポートレート一枚が置かれただけ、しかもそれは棺に収められたかれの写真一枚だったという。そのことを紹介したソビエト期のすぐれた版画研究者B・Я・アダリュコフは、情熱あふれる人々がミュージアムを復興させるべくロヴィンスキイに関する資料を集めること、しかも、一九一六年時点ではいまだかれを記憶している人がい

るので、その仕事を早急になすべきことを提案している。

ロシア革命後のロヴィンスキイの生誕百年にあたる一九二四年には、かれの偉業を称える文章が夕刊紙「赤い新聞」に見られるものの⁽⁴⁸⁾、さして大きな反響があったとは言えない。この新聞記事にもあるように、収集史や書誌学の上で大きな仕事を残したことは、本来が壮大だが、地味な仕事の領域においては認められても、広く社会的な評価を受けるのは難しかったためだろう。まして、革命直後の「混乱」の下、コレクションという個人的事業（好事家的、ないし趣味的、さらにブルジョア的というレッテルを貼られることになる）が初期のソビエト文化政策によって認められる余裕はなかったはずであるから。

七 ロヴィンスキイ以後

ロヴィンスキイの『ロシア民衆絵画』がロシア民衆版画研究にとっての一大金字塔として燦然と輝いていることはくり返し述べてきた。永年にわたるコレクションと研究の集大成であるその著作は、分量のみならず資料学的・方法的基礎の点で現在にあってもなおその意義をまったく失うことがなく、そのことは現代の研究者も等しく認めるところである。

しかし、あまりに大きな存在は「神話」を生み出し、以後の研究をある意味で「停滞」させてしまうことがある。かれの仕事の意義があまりに大きすぎたために、二〇世紀のロシア・ルボーク研究はいくつかの例外を別にすれば、半世紀余りにわたって目立った発展を遂げなかったと言える。こうした沈黙状態は、大きく見れば一九六〇年代後半まで続いた。むろんこの間にも、前記の例外にあたる、基礎的なルボーク研究が地味に継続されていたことも忘れて

はならない。

作品としてのルボークそのものに関してはここではふれない。ロヴィンスキイ直後の一九世紀末に始まる「ルボークへの回帰」（アレクサンドル・ベヌア）は、一方でロシア・アヴァンギャルド絵画へ、他方で、ヨーロッパを舞台とした第一次世界大戦と、そしてロシアにとっての日露戦争の両戦争でのパトリオティクな宣伝メディア化へ、さらにはロシア革命後のソビエト社会・文化形成のためのプロパガンダ・啓蒙手段へと「発展解消」し、拡散していくのである。ソビエト期のルボーク作品そのものが、そうした二〇世紀全体にわたるロシア期からソビエト期の社会変容の産物であることは忘れてはならないだろう。その問題は、ここでの議論の枠を超える。

一九二〇年代のルボーク論としては、H・A・コーデンとH・C・アブラモフ共著の『民衆のルボーク』（一九二九年）、Φ・C・ロギンスカヤ『ソビエト・ルボーク』（同）があり、ともに革命前のルボークと「新しい」ルボークの連続・不連続を論じたものである。ソビエト型プロパガンダにルボークがいかに役立つかという問いかけはきわめてアクチュアルだった。すぐれて時代の文化と風俗を写し取ることにルボークの本質があるとすれば、一九二〇―三〇年代という社会変動とルボークは無縁ではないはずだった。一方で、伝統的なルボークに対する研究への関心が低下したのは、ある意味で当然であろう。そうした中で、E・II・イヴァノフ編『ロシア民衆ルボーク』（一九三七年）は革命までの作品を収録した画集だが、ロヴィンスキイの視野には収まらなかった作品もあり、貴重な例外である。発行年代からすれば、「宗教・プロパガンダ」作品や旧教徒作品などが取り上げられていて、興味深い。

この時代のもう一つの例外として、M・M・ニキーチンのルボーク研究があることを記しておく。その成果は具体的な形を取らなかったが、最近、その存在が明らかになった原稿により、かれの構想の概要を知ることができる。⁽⁴⁹⁾ かれは一九三二年と一九三六年に、それぞれ「アカデミヤ」出版と国立美術出版社からルボークに関する書籍を刊行す

ることを計画していたという。現在、判明しているのは、全二二章からなる各章のタイトル（一九三一年に書かれたとされる）と、そして、第一章の一部のみだが、その構想の大きさと周到さは抜群のものがある。

また、一九三〇—四〇年代に継続されたのが、C・A・クレピコフによるきわめて地道なルボーク関連資料の収集とカタログ作成の作業だった。その成果は、ルボークの画面に「引用」された民謡のテキスト分類をおこなった『ルボーク。第一部、ロシア民謡』（一九三九年）であり、続刊は実現しなかった。また、レルモンツフ、プーシキン、クルイロフ、ネクラソフの詩と対応するルボークの絵ならびにテキストカタログ（一九四八、一九四九、一九四九、一九五〇年）があり、現代でもきわめて基礎的な資料として有効なものである。

その後、ルボーク画集としては、上記のイヴァノフが編纂したものを次ぐ成果として、かろうじて一九六二年に刊行された『一七—一九世紀のロシア・ルボーク』があるのみである。И・モルダフスキならびにヴラザーミル・C・パフチンの解説文には、新しさは見られない。目に付くものとしては、一八世紀文学研究で知られるИ・H・ベルコフが発表したルボーク文献書誌（一九五八年）は、一八一〇年から一九五五年までの時代枠で一九二点のデータを集めたものとして、現在も価値が高い。また、すぐれたロシア文化史家のЮ・M・オフシャンニコフ『ロシア・ルボーク』（一九六二年）がバランスの取れたルボーク論を展開している以外はほとんどなく、ごく啓蒙的なルボーク紹介が雑誌に時たま掲載されるにすぎなかった。

モスクワのプーシキン美術館で一九七〇、七一年と相次いで開催された、木版（一七—一八世紀）、銅版（一八一—一九世紀初頭）のルボーク展は大きな反響をもたらした。この流れを引き継ぎ、決定づけたのは、一九七五年にやはりプーシキン美術館で開催されたロヴィンスキイ生誕一五〇年記念のルボーク展、そして一九八〇年に現ベテルブルグのロシア美術館でのルボーク展（一七世紀末—一九世紀末）である。特に前者では、展覧会にちなんでコンフェレ

ンスが開催され、その成果は論文集『一七一一九世紀ロシア民衆版画とフォークロア』（一九七六年）としてまとめられる。この時期以降、ルボーク研究はいわばトンネルを抜けたとしても過言でない。ロヴィンスキイ「神話」からの脱却が始まり、現代まで展開してきたと見てよい。

一九七〇年代以降のルボークにたいする関心について触れておく。

ルボークの画集として価値ある主なものの出版は先述の一九三七年と一九六二年、一九六八年におこなわれたが、一九八四年に英語版として『ルボーク』が刊行された。久々に規模の大きなものとして注目されたが、やはりソビエト時代のものらしく、印刷面から見れば色のノリが悪く残念な出来だった。ただし、近年のルボーク研究の中心的人物であるE・A・ミーシナが編纂し解説を付けた『一七一一八世紀のロシア木版画』は時代を主題の時期に限定したものであるとはいえ、印刷も悪くなく画集として役立ち、しかもルボークの「黄金期」の全貌が明らかにされていることから貴重である。

ルボークは、一九三〇年代以降、ソビエトの「新しい」ルボークとして生き延びたとはいえ、たんなるソビエト・プロパガンダとして機能した／すると理解するのでよいかに関しては、特にソビエト時代には見解がかなり分かれるところであろう。雑誌『ソ連装飾芸術』（一九八五年第一二号）が、「古いジャンルの新たな生」をテーマに開催した円卓会議の議論を掲載したのは、そうしたルボークの役割をめぐる議論を活性化させようとした点にある。研究者だけでなく、実際の作家たちが参加し、ペレストロイカ開始前夜の大衆文化状況を論じて、興味深い。

ルボークの展覧会としては、モスクワのプーシキン美術館で「ロヴィンスキイのコレクションによる民衆絵画」と題して一九九七年二月三日から四月二四日の会期で開催された。それに合わせて、四月二一―二四日に第三〇回ヴィッセル研究報告会がおこなわれ、モスクワ、ペテルブルグから三七名の参加（会議の詳細は『生きる過去』一九九八

年第四号)、成果は『民衆絵画の世界』(一九九九年)としてまとめられた。

収蔵されたルポークのカタログとしては、ロシアが関係した戦争を題材としたルポークの収蔵目録がある。第二部(一九九五年)は、ロシア国立公共歴史図書館の稀覯本部門に収蔵されている露日戦争もの一七七点のリストであり、作品の簡単な概要が記載されている。

ベレストロイカ以後の状況下、常設のルポーク美術館も誕生した。モスクワ市内に一九九二年に開館した民衆版画美術館がそれである。館長はオリジナル版画の制作者でもあるヴィクトル・ペンジンで、全体は二階建て四ホールからなる。内部の展示は時代順に八部門、展示品はごく一部を除き複製・レプロダクションである。ただし、このこれまでのルポークの一七一―一八世紀を中心とした代表的作品の展示だけでなく、現代のルポーク製作にも大きな関心が向けられ、その作品が並べられていることがこの博物館の特徴であり、ルポークが今なお生き続けていることの証拠である。現代の作家や子供たちが実際に製作をするアトリエが併設されている。⁽⁵⁰⁾

ルポーク研究として一九八〇年代以後の注目すべき仕事を概観しよう。ボリス・M・ソコロフは一九九四年に「一七一―一九世紀ロシア民衆版画の芸術的言語」のタイトルで芸術学準博士候補の資格を獲得したが、これはルポークを絵画、文学、都市フォークロアという複眼的な視点からとらえなおし、ルポークをひとつの芸術言語として理解しようとしたものである。この仕事は『ロシア・ルポークの芸術言語』(一九九九年)として公刊されている。モスクワの歴史博物館研究員エレナ・M・イートキナによる芸術学準博士候補資格論文「ロシアの手描きルポーク」(一九八五年)は、おもに宗教的な題材を扱い、宗教異端である旧教徒の人々の間でひっそりと作られてきた、手で描き、彩色されたルポークという、これまで本格的に研究されることが皆無だった領域を開拓したものととして大きな注目を生んだ。一九九二年に単行本としてまとめられたものは四〇ページほどの歴史的解説と作品一五二点のカタログなら

びに解説からなり、この中の約百ページが色刷りの図版となっていて、画集としても貴重である。

旧ソ連邦科学アカデミー付属民族学研究所のタチャーナ・A・ヴォローニナの、同じく歴史学準博士候補資格論文「一九世紀二〇—六〇年代のロシア・ルボーク」は一九九〇年に合格した。内容はその副題の「製作、存在、テーマ」が示すように、ルボークがどの地方でどのようにして作られ、いかに流布し、どのように社会に受け入れられたかを数字をあげながら実証的に分析した社会学的仕事であり、一九九三年には同名の表題で「民族学文庫」シリーズの一冊として公刊された。イヴァン・スイチンに象徴されるルボーク大量消費時代を目前とした一九世紀前半から半ばの時期にルボークがどのようにして民衆文化の作品としてロシア社会に定着していったかをもっとも具体的に表象化する仕事として大きな意味を持っており、近年、注目されて多くの成果が生まれている本の社会史ならびに大衆文学研究・読書史・書物史などの研究分野にとっても大いに役立つ労作である。

これとほぼ同時期のルボーク研究史をテーマとしたオレグ・P・フロモフの歴史学準博士候補資格論文「一九世紀ルボーク画の史学史」（一九九一年）は、一九世紀のロヴィンスキイ以前のスネギリョフ、ブスラーエフらのルボーク研究の全容を明らかにしたものとして貴重である。ルボーク研究の出発点に位置し、ルボークというタームを最初に使用した人物であるスネギリョフについては、先にも述べたが、これまでの民俗学・民族学史で言及はされてきたが、その「好事家的」で「官製ナロードノスチ」論の擁護者としての立場から否定的にとらえられ、本格的な研究がおこなわれてこなかった。この点でもフロモフの仕事は意味がある（スネギリョフについては『イヴァン・ミハイロヴィチ・スネギリョフ。書誌索引』（一九九四年）が刊行されて役立つ）。さらにフロモフは、上で参照したとおり、ロヴィンスキイの生涯の足跡に関する実証的調査と研究を発表している他、国立公共図書館に収蔵された版画本の丹念な調査をもとに『ロシアのルボーク本』（一九九八年）と題したモノグラフを発表している。

以上あげたもののいずれも準博士候補資格論文として発表されていることからわかるとおり、ルボーク研究が文字通りの意味でアカデミズムとして確立したことが一九八〇年代半ば以降の注目すべき現象である。もちろん、量的にはいまだ十分ではなく、加えてルボークという対象自体が多面的であることから、美術史をはじめとして文学研究、フォークロア研究、歴史学、社会史研究、社会学など多くの関連分野にまたがるという困難さが乗り越えられているとは言いがたい。例えば、ペテルブルグにあるロシア科学アカデミー文学研究所（プーシキン館）のフォークロア部門は、関連する文献目録を永年にわたって定期的に刊行しているが（かつてメリツがおこなっていた作業をT・V・イヴァノヴァが引継いだ）、そこでのルボークの扱いはあまり大きいとは言えない。ようやく近年、ルボークならびに大衆本（ルボーク本）、フォークロアの活性化などがテーマとしての重要性を持つようになったことを受けて、分類項目として立てたり、関連文献への目配りがおこなわれているとはいえ、⁽⁵¹⁾上記の多分野にまたがるのが書誌作製を困難にしているのである。ちなみに、ルボーク関係書誌としては、先のベルコフによるもの以降、まとまったものがなかったが、学術アリマナフ『伝統文化』（二〇〇一年第一号）がルボーク特集を組む中で、周到なビブリオグラフィ（H・P・チモーニナ編）を掲載したのは快挙である。⁽⁵²⁾

これら以外にルボークに関する文献として目についたものをあげる。二〇〇二年に出版されたものとして、ロヴィンスキイの労作の簡略本（一九〇〇年、ソブコ編）の復刻は意味が大きい。かつて西欧で出版されたそのままの復刻でなく、現代の民俗学研究者アンナ・Φ・ネクルイロヴァの解説を序文として付けたもので、研究史的価値も高い。論文集『一七—一九世紀民衆絵画。資料と研究』（一九九六年）は、これまでのロボークに関する研究論文と資料紹介を収めた便利なアンソロジーである。雑誌「生きた過去」一九九九年第一号には「ルボークの世界」と銘打った小特集が組まれた他、二〇〇〇年第四号では、「ナイーブな文学」という特集がなされ、二〇世紀のルボーク作家アフ

アナシイ・キリコフの生涯と仕事に関する紹介記事がある。ネクリロヴァの仕事としては、「覗きからくりに見るコミカルな戦争ルボーク」（『ロシア・フォークロア』二五、一九八九年）、すでに記した簡略版『ロシア民衆版画』復刻本への序文がある。この他に、K・E・コレボヴァの「ルボークと口承の語りの伝統」（『ロシア・フォークロア』二六、一九九一年）、ルダコヴァの「ムスチョーラのゴルイシェフ・リトグラフ工房」（一九七六年）と「ルボークに見るモード」（一九九二年）、日露戦争も含む一九世紀末から二〇世紀初頭の戦争に関連したルボークを概観したΓ・ミャソエドフの論文（一九八八年）、ルボークに描かれた日本イメージを考察したミハイロヴァによる英語論文（一九九八年）など。ただし、特に後半にあげた二〇世紀初頭を中心とした戦争とナシヨナリズムの時代におけるルボークならびに大衆文化に関しては、ヤーン・ヒューバーツのモノグラフ『第一次大戦間ロシアの愛国的文化』（一九九五年）がルボークに限ることなくより広い時代精神の中で論じている。映画史研究者のネヤ・ゾールカヤの『フォークロア、ルボーク、スクリーン』（一九九四年）はルボークを民衆演劇や覗きからくりから映画までのヴィジュアル芸術史のなかでとらえた力作である。また、二〇世紀初頭以降のアヴァンギャルド芸術、特にゴンチャローヴァ、カンヂンスキイの創造活動とルボークとの関連については、E・B・オフシャンニコヴァ「モスクワの第一回ルボーク展の再現のために」（一九九七年）、同「ラリオノフとゴンチャローヴァ」（二〇〇一年）、ソコロフの論文「ロシア・ルボークの蒐集家カンヂンスキイ」（一九九八年）が詳しい。

Γ・Γ・ポスペーロフのモノグラフ『ダイヤのジャック。一九一〇年代モスクワ絵画におけるプリミチフと都市のフォークロア』（一九九〇年）は、直接ルボークを問題としているわけではないが、貴重な指摘を多く含む。このポスペーロフがとりあげた二〇世紀初頭のプリミチフあるいはネオ・プリミティヴィズムの問題は、一九六〇年代末から美術史学・都市文化史の分野を中心として関心の対象となってきたが、近年再び注目を受けている。その一例は一

九九五年一〇月から一九九六年一月まで、モスクワのトレチャコフ美術館で開催された展覧会「ロシアにおけるプリミチヴ。一八一―一九世紀、アイコン、絵画、グラフィクス」であり、そのカタログ（一九九五年）は近年のこの分野の急速な進展を示している。約三五〇点の展示品で五〇点がルポークである（具体的には、上で記したイトキナがその全貌を明らかにした手描きルポークであり、カタログでもその部分の編集・選択ならびに解説の著者は彼女である）。また、この展覧会のキュレーターでカタログの「貴族屋敷（ウサーヂバ）のポートレート」部分を担当執筆したA・A・レーベジェフは、一八世紀後半に都市近郊や地方の貴族領地で大きく展開していった肖像画や家具をはじめとした習俗に注目し、そこに一種ロシア文化史におけるプリミチヴの発生と開花を認め、ひいてはロシア文化の源流そのものを見ようとした労作『丹念さと熱意をこめて』（一九九七年）を発表して新しい文化史の方向を示した。ここには特に一八世紀ルポークに関する言及も多い。これら一連のプリミチヴ文化をめぐる論考がルポークにたいする関心の背景を形成していると言って間違いない。

こうした多方面に及ぶ新たな仕事が一九世紀的で、かつ二〇世紀にも大きな功績を残したロヴィンスキイの「神話」からの解放を目指し、ポスト・ロヴィンスキイの流れを促進させていることは間違いない。

註

- (1) 坂内（二〇〇六年）を参照。なお、本稿は坂内（二〇〇五年）を全面的に改稿したものである。
- (2) かれの生涯を知る資料としては、コーニやザベリンらの回想や伝記があり、近年はヴラスカヤ（一九七六年）などの仕事があるだけであった。ようやく、フロモフやバヴロヴァによる本格的調査がおこなわれており、本稿でも参照した。近く、まとまった伝記が書かれるものと思われる。
- (3) 具体的な男女人数、ドミトリイが何番目の子供かなどについては、本稿をまとめる段階では確定できなかった。ドミトリ

イの家族、両親などに関しては、前記のパヴロヴァ、フロモフらの仕事を参考にした。

- (4) ザボロッキフ（一九九三年）。
- (5) パヴロヴァ（二〇〇〇年）一三七ページ。
- (6) ロシアのオリデンブルグスキイ家の四世代、ならびにこのピョートルに関しては、アンネンコヴァとゴリコフの共著『ペテルブルグのオリデンブルグスキイのプリンツたち』（ペテルブルグ、二〇〇四年）がこれまでの研究の集大成であり、詳しい。また、この法学校に関しては、多数の文献があるが、とりあえずは、橋本（一九九九年）、高橋（二〇〇一年）。
- (7) プロイトマンとドービンの『チャイコフスキイ通り』（二〇〇三年）を参照。一八四九年刊行になるツイロフのペテルブルグ全図を見ると、セルギエフ通り（現チャイコフスキイ通り）の南側二番地、フォンタンカ河岸通り五番地にある（Архив тринаццати частей Санкт-Петербурга. Соот. Н. Цыгов. Репринтное воспроизведение. М. 2003.）もともとの区画は元老院議員イヴァン・ネブリュエフが一八一四年に購入し、二軒の家を建てた場所である。かれは一八二二年退職、翌年死去。一八三五年に建築家А・И・メリニコフとВ・П・スターソフがこの建物を丸屋根とイオニア式円柱のある古典主義建築に建て替えた。二〇世紀初頭にシュゾールにより改築されるが、その基本的プロポーションと特徴は残っていた。かつて法学校があった建物は州裁判所として今も残り、フォンタンカ川沿いの景観を効果的なものにする目的からか、外壁を改装し、塗り直している（二〇〇五年九月段階）。
- (8) 前出の高橋（二〇〇一年、四二一―四三ページ）には、カリキュラムがある。
- (9) 「かつて、作曲家のセローフや評論家のスターソフがいたころは、ロシア音楽文化の源泉の一つであったこの学校も、チャイコフスキイが入学したちょうどそのころは、むかしの面影すらなくなっていたのだ」（クーニン『チャイコフスキイ伝』川岸貞一郎訳、新読書社、一九六〇年）。ただし、クリミア戦争から一八六〇年代改革期が近づくにつれて、その雰囲気も次第に宥和的なものになっていき、ヤズィコフの教育方針も変化する。在学中のチャイコフスキイやА・Н・アプーフチンらによる学生の活動はその現れである。チャイコフスキイは一八五〇年、一〇歳の時に予科入学、九年間をここで学んだ。しかもこの法学校時代が、そこでの音楽教師たちから受けた影響やグリーンカやアントン・ルビンシュテインらによるペテルブルグ音

楽時代の幕開きという時代環境から、かれの音楽生活のスタートラインとなったこともよく知られている。ただし入学・在学年度から見て、チャイコフスキイとロヴィンスキイの出会いはなかったと思われる。

- (10) (7) にあげたプロイトマンとドーピン (二〇〇三年)。
- (11) コーニ (一九二一年)。
- (12) 県が任命した司法官 (民事・刑罰院副院長、検事、監督官) の学歴別の人数比が、高橋 (前掲、四五ページ) にある。それによれば、一八五〇、五六、六〇年の副院長、検事のほぼ二〇—二五パーセント、四分の一が法学校の卒業生である。
- (13) パヴロヴァ (二〇〇〇年) 一三八ページ。
- (14) ザベリーンの伝記、仕事を概観できるものは、フォルモゾフ (一九八四年)。
- (15) ザベリーン (一八九六年)。
- (16) フロモフ「ザベリーンとロヴィンスキイ」(一九九七年)。
- (17) ザベリーン『日記、覚え書き』(二〇〇一年)。さらに、近年、フロモフが明らかにしたことによれば、モスクワのプーシキン美術館に収蔵のロヴィンスキイ・アーカイヴには「一八四九年遠征日誌」なる資料が収蔵されているという。それによれば、当時、毎年夏に二人はこうした「遠征」をくり返しており、この「日誌」は教会や各種の建築物、遺跡や民衆の生活ぶりばかりか、住民との会話や生活のディテールまでを詳細に書き記した点で、民族学的データのフィールドノートであるという。また、ザベリーンはこの年の「フィールドワーク」を論文 (モスクワ県クリン郡のコリャダー「クリスマス週間の儀礼歌」) として発表している。
- (18) アフシャルーモフ家の四人兄弟の長兄。父親はナポレオン戦争に参加、その体験を文章化した回想記を発表した。弟のドミトリイはペトラシエフスキイ・サークルに参加、アクチヴなメンバーとして逮捕された。ニコライ一世に減刑を求め、死刑は免れてヘルソン、コーカサス、チェチニヤへ送られた。
- (19) 一八九五年二月一〇日におこなわれた、ロヴィンスキイ追悼の集いにおける発言であり、その後、公刊された『帝室アカデミーでの公開の集い』一八九六年、三ページ)。

- (20) ここでは、シモン・ウシャコフのイコン画法指南書などイコン史関連の重要な資料がロヴィンスキイの手で発見された（バヴロヴァ、一三九ページ）。さらに、M・A・コルフ（一八四九―一六一年に館長）、A・Φ・ブイチコフ（当時、手稿部責任者、一八八二―一九九九年に館長）らとも知己を得て、特に後者からは多くの貴重な情報を入手する一方、ロヴィンスキイ自身も、ピョートル大帝の貴重な肖像画数点を図書館に寄贈している。
- (21) 英国河岸通りにあった、ルミヤンツェフの建物で、かれが集めた書籍と古文書を収蔵。一八六一年にモスクワのパシユコフ・ミュージアムへコレクションは移された。
- (22) ペテルブルグでの調査で発見した多く資料をもとにして、ロシアを中心とした美術史関連の資料集をザペーリンと共同で出版しようとして、その刊行費用の援助をC・Γ・ストログノフに求めている。ただし、その試みは理解を得られなかった（ザペーリン「回想」、九ページ）。
- (23) ただし、かれは購入資金に余裕があるわけではなかった。例えば、一八五八年の時点でポゴーチンに借金（五年間で五千ルーブリ）を申し込んでいる。
- (24) A・バルトシュ、G・ナグラ、J・パッサヴァンら同時代のヨーロッパにおける版画史研究にもシチェドリン図書館での調査によって通じていた（ヴラスカヤ、七ページ）。
- (25) この改訂版には、一八八〇年代末までの千二百名を超える項目が含まれ、さらには、一八八六―一八九九年のロヴィンスキイの著作の付録も収録されている。これとは別に、「索引」（人名、件名）は単独に出版された（テヴァシヨフ編、一八九九年）。さらなる改訂版は、テヴァシヨフ（一九〇三年）、オポリヤノフ（一九一三年）らによって刊行されている。
- (26) コーニはロヴィンスキイに関して多数の文章を発表している。参考文献にその一部をあげた。
- (27) かつての上司であったモスクワ県知事ザクレフスキイについては、一点の肖像画（複製が収録）をあげ、そのキャリアならびに人物・人柄、さらには容貌について詳しい記載がある。
- (28) ワーニカ・カインの肖像画は六点あるとされている。参考までに、その項目解説文を以下にあげておく。「一八世紀半ば、その遍歴で知られた泥棒・盗賊。のちに、モスクワ警察の密偵となる。かれの生涯に関するきわめて興味深い情報とかれが作

った歌は、次にその名前のある書籍に収められてある。ちなみに、ここで言及のある書物とは、『一人のベテン師の詳細かつ信頼できる物語。ロシアの有名な泥棒にして盗賊、かつてのモスクワの密偵ワニカ・カイン、フランスのベテン師カルトーシャとその仲間たち』（ペテルブルグ、一七七九年）のことで、これはマトヴェイ・コマロフが一七七五年に著した作品である。このロシア最初の（？）都市作家・大衆作家に関しては、ヴィクトル・Ｂ・シクロフスキイの古典的研究があるのは周知のことだが、J・B・カメヂナ（一九八四年）、B・J・ラーク（二〇〇〇年）による研究がある他、後者が校訂したテクストで作品も読むことができる。

(29) ロヴィンスキイ自身の序文に登場する人物類型の一つに、サモドゥール＝サモウチカなる言葉がある。文字通りに訳せば「気まま者」独学者とでもなろうが、これは「個人」の時代たる一八世紀後半に登場した新たな社会階層に属する人々のことであり、一般的には奇人・変人としてとらえられる。この言葉がいつごろ、誰によって使われ始めたのか、は定かでないが、ロヴィンスキイの同時代に「有名人」と並んでこの語が広く流布していたこと（例えば、プイリャーエフの著作『著明なる奇人と独創人』を想起）、それがロシア文化史＝習俗史のキーワードとなっていたことは、今後検討の余地がある。また、ロヴィンスキイ自身がこうした個性的な人格＝人物像に強い関心をいだいていたことも、考察対象となるはずである。

(30) オストロイ（一九八八年）六一ページ。

(31) 一九九〇年に著作集全二巻が刊行されている。

(32) マカロフ（一八二一年）、スヴィニニン（同）を参照。

(33) かれの刊行した『諺に見るロシア人』（一八三二―三四年）や『ロシア庶民の祭と迷信的儀礼』（一八三七―三九年）は、むろん時代的な限界を持ちながらも、ロシア民俗学の初期のモノグラフとして知られている。かれの著作目録は、モスクワのロシア国立公共歴史図書館によって一九九四年に刊行された。

(34) H・バルスコフ『ボゴーゼンの生涯と仕事』第七巻、三〇一ページ。また、フロモフ（一九九二年、七九ページ）、ザベーリンの回想などを参照。

(35) 『ロシア民衆絵画』の簡単な全体像紹介はヴラスカヤ（一九七六年）、オストロイ（一九八八年）で読むことができる。

- (36) これらの手紙の宛先はすべて A・E・ヴィクトロフなる人物だが、おそらく最後の文面からすれば、大著の出版を担当していた編集者なのだろう。
- (37) かれはヴラヂーミル県統計委員会のほか、帝室ロシア地理学協会や自由経済協会、モスクワ考古学協会などの通信会員としての活動、考古学・民族学・歴史学に深い造詣のある研究者（ヴラヂーミル県報」に多くの論文が掲載された）として、また、変わったところでは、「行商人用語辞典」（八五七語収録）の編纂者として、多方面にわたってめざましい活躍をした「地方インテリ」である。上記のアトリエの他、日曜絵画学校、女学校などを村内に開設している。かれの活動と仕事に関しては、H・II・ルダコヴァの論文（一九七六年）が最新の成果である。基本的資料としては、『II・A・ゴリシエフの二五年の活動、一八六一—一八八六年』（ヴラヂーミル、一八八六年）、『ヴラヂーミル県ヴァズニキー郡ムスチョーラ村にあるII・A・ゴリシエフ商会の本と絵の制作五〇年』（ヴラヂーミル、一八九五年）、E・シムルロ『イヴァン・アレクサンドロヴィチ・ゴリシエフ』（ペテルブルグ、一八九一年）、B・P・ゾートフ『農民Ⅱ考古学者』（ヴラヂーミル、一八八七年）。ゴリシエフのような、日本風に言えば「地方文人」の文化史的意義の大きさは、おそらく一八世紀後半の「帝国化」にその起源を持ち、「地方の発見」「ウサーチバ文化の形成」とも密接に関わっている。近年の歴史学における「地方史」への高い関心、特にウサーチバ文化研究の多くの成果、レーベジェフの仕事（一九九七年）などが参考になる。
- (38) 『『二五年の活動』（一八八六年）に著者リストがある。例えば、ルボークに関する最初の仕事と思われるものとして、『同県報』一八六九年第三九、四一、四三号に「昔の民衆的ルボーク画」なる文章が発表されている（同上三八ページ、未見だが、かれの『著作集』第一巻に収録されているものと同じと思われる）。
- (39) パーヴェル・ベルコフが一九五八年に発表したルボークに関するピブリオによれば、『ヴラヂーミル県報』（一八七九年、第二四号）に掲載された「昔の版画原板二枚による摺りもの。キリストの礎、ならびに赤紫の棺に座るイエス・キリスト」は本文七ページ、図版二枚で、抜き刷りとして同年に出版された。
- (40) バルヂナ（一九七二、一九七三年）を参照のこと。
- (41) 『ゴリシエフとさまざまな教養人との手紙往来』（一八九五年、ヴラヂーミル）。

- (42) 二人の文通は、一八九四年二月二日のロヴィンスキイの手紙まで続く。この手紙でかれは、ゴリィシェフ商会二五周年のお祝いの言葉を送っている。
- (43) 一九九八年にプーシキン美術館で開催されたロヴィンスキイのルボーク・コレクション展には、ロシア・ルボークだけでなく、かれが収集したインド、中国、日本などの「ルボーク」も展示された（日本版画は六点）。また、かれの所持品の中に日本渡航の際のパスポートがあり、これもこの展示会に出品された（ただし、筆者未見）。これについては、サコヴィチ（一九九九年）を参照。
- (44) ヴズドルノフ（一九八六年）。
- (45) 現代の研究者ヴラスカヤは、ロヴィンスキイの社会的ポジションの評価を再考するために、かれがペトラシェフスキイ事件を肯定的にとらえていたとの考え方を提起している。その根拠のポイントは、叔父のポゴージンの日誌に記された「ペテルブルグで四十人が捕まった。ロヴィンスキイ。『法律家たちの学校魂』（一八四九年五月二日付け）という言葉である。ただし、これだけでロヴィンスキイが事件参加者たちに共鳴していたというには不十分である。むしろ、親友のアフシャルモフが、その弟が事件に連座していたとはいえ、必ずしも肯定的でなかった（ただし、弟がらみでつねに官憲の監視下にあった）ことを考慮すれば、若い世代ゆえの「理解」は持つても、職業柄もあってやはり一定の距離を置いていたとするのが妥当と考えられる。むしろ、この点は今後の調査と検討が必要であるが、むしろ重要なのは、一九世紀半ば以後の時代精神が、ジャンルや個人の関心を越えて否応なしにナロードとの「正面対置」を求めていたことである。
- (46) アザドフスキイ『ロシア民俗学史』第二巻（一九六三年）
- (47) ペテルブルグの最期の住居は、遺言により妻のリーチャ・アレクサンドロヴナの所有になったが、それは一九〇一年に古物商A・Φ・フェリテンの手に移り、一九〇五年に五階建ての建物に改築され、原型を残さない（バヴロヴァによる）。
- (48) オストロイ（一九八三、一九八八年）。法学校に寄贈された蔵書は、一九二四年に「マルクス主義者学術協会」の管理となり、その一部は売却されたという。ただし、バヴロヴァは、その大部分がロシア科学アカデミー図書館に収蔵されているといい、その根拠となる経緯についても述べている。

(49) ドーピンとレイトプラト（一九八一年）。共著とはいえ、二三歳の若さで『文学と商業。スミルヂンの本屋』（一九二九年）を世に出したこの注目すべき研究者（フォルマリストの「残党」であろう）が、ルポークに強い関心を抱いていたことは興味深い。一九八五年五月に、かれを記念した会議（大祖国戦争時の学問インテリゲンツィヤ）がモスクワの国立マヤコフスキイ博物館で開かれた。

(50) 一九九八年三月に筆者がこの美術館（モスクワ市内、マールイ・ゴロヴィン通り一〇/九番地、一九九二年に開館、入場料無料）を訪問した時点で、二階建ての木造建築の二階フロアに四ホールがルポーク展示に当てられていた。館長のベンジン氏（一九三八年生まれ）より贈呈された展示作品リスト（タイプ原稿コピー）によれば、四ホール全部で合計一一六点である。ただし、現在、この美術館は休館中とのこと。

(51) むろん、どのような項目をたてるかによって文献の拾い上げ方は変化するが、参考までに、分類項目をあげるならば、「民衆のルポークとルポーク本」（一九九一―九五五分、二〇〇一年刊）「ルポーク絵と行商人」（一八〇〇―一五五分、一九九六年刊）「ルポーク。民衆本」（一九七六―八〇年分、一九八七年刊）など。

(52) 書誌の分類項目は「アルバムと展覧会」「芸術的システムとしてのルポーク」「ルポークと文学、絵画」「研究者」「民衆本」。

参考文献

ロヴィンスキイ関連

（かれの著作目録は、以下にあげた文献中のアダリユコフ論文の末尾に掲載されており、以下では主要なものに限った）

Дарюков В. (1916) Дмитрий Александрович Ровинский. Старые годы. 1916, июль-сентябрь. П.

Азадовский М. К. (1963) История русской фольклористики. Т. 2. М.

Бройтиман Л. И. Дубин А. С. (2003) Улица Чайковского. М.

Буслаев Ф. И. (1861) О русских народных книгах и дубочных изданиях. Отечественные записки. Т. 88.

- Бычков А. Ф. (1896) Д. А. Ровинский и императорская публичная библиотека. СПб.
- Вздорнов Г. И. (1986) История открытия и изучения русской средневековой живописи. 19 век. М.
- Вракак О. (1976) Д. А. Ровинский, его современники и последователи. В кн.: Народная гравюра и фольклор в России 17-19 вв. М.
- Высоцкий С. А. (1988) Кони. М.
- Голышев И. А. (1874) Аглас рисунков с старинных прямильных досок Вязниковского уезда Владимирской губернии. Мстера.
- Двадцати-пяти-летняя деятельность И. А. Голышева. 1861-1886 гг. (1886) Владимир.
- Забеглин И. Е. (1896) Воспоминание о Д. А. Ровинском. В кн.: Публичное собрание Императорской Академии Наук в память ее почетного члена Д. А. Ровинского 10-го декабря 1895. СПб.
- Забеглин И. Е. (2001) Дневники. Записные книжки. М.
- Заболовских Б. В. (1993) Русская гравюра. М.
- Зотов В. Я. (1887) Крестьянин-археолог. Владимир.
- Иван Михайлович Снегирев. Биографический очерк. (1871) СПб.
- Иван Михайлович Снегирев. Библиографический указатель. (1994) М.
- Кони А. Ф. (1896а) Дмитрий Александрович Ровинский. Очерк. Вестник Европы. 1896-1
- Кони А. Ф. (1896б) Общественная и государственная деятельность Д. А. Ровинского. В кн.: Публичное собрание Императорской Академии Наук в память ее почетного члена Д. А. Ровинского 10-го декабря 1895. СПб.
- Кони А. Ф. (1899) Ровинский Д. А. Энциклопедический словарь. Издатель: Ф. А. Брокгауз и И. А. Ефрон. Т. 52. СПб.
- Кони А. Ф. (1921) О Ровинском. Среди коллекционеров. 1921-5.

- Когляревский А. А. (1856) Взгляд на старинную русскую жизнь по народным глубочным изображениям. Сочинения. Т. 1, М., 1889.
- Макаров М. (1821) О Московских Ведомостях, изданных в царствование Государя Императора Петра Великого. Вестник Европы, ч. 117
- Макаров М. (1833) Листки из пробных листов для составления истории русских сказок. Телескоп, ч. 18.
- Некрядова А. Ф. (2002) Истинно патриотический подвиг. В кн.: Русские народные картинки. Собрал и описал Д. Ровинский. (Т. 1-2, СПб. 1900) СПб.
- Н. М. (1962) Ровинский А. П. Русский биографический словарь.
- Острой О. С. (1983) «Подробный словарь русских гравированных портретов» Д. А. Ровинского. Книжное дело в России во второй половине 19-начале 20 в. Сб. научных трудов. Д.
- Острой О. С. (1988) Дмитрий Александрович Ровинский. Советская библиография. 1988-1.
- Павлова Г. В. (2000) Дмитрий Александрович Ровинский и Санкт-Петербург. Краеведческие записки. Исследования и материалы. Вып. 7. СПб.
- Переписка И. А. Гольшера с разными учеными лицами. (1898) Владимир.
- Полупнина Н. Флоров А. (1997) Коглекционеры старой Москвы: Библиографический словарь. М.
- Публичное собрание Императорской Академии Наук в память ее почетного члена Д. А. Ровинского 10-го декабря 1895. (1896) СПб.
- Пятидесятилетие книжного и картинного производства фирмы И. А. Гольшера. (1895) Владимир на Клязьме.
- Ровинский Д. А. (1872) Словарь русских гравированных портретов. СПб.
- Ровинский Д. А. (1881-93) Русские народные картинки. Кн. 1-5, атлас т. 1-7. СПб.
- Ровинский Д. А. (1884-90) Материалы для русской иконографии. Вып. 1-2. СПб.

- Ровинский Д. А. (1886-89) Подробный словарь русских гравированных портретов. Т. 1-4. СПб.
- Ровинский Д. А. (1895) Подробный словарь русских гравированных портретов. Т. 1-2. СПб.
- Ровинский Д. А. (1900) Русские народные картинки. Т. 1-2. СПб.
- Ровинский Д. А. (1903) Обзорение иконописания в России до конца 17 века. Описание фейерверков и иллюминаций. 1674-1891. М.
- Рудякова Н. И. (1976) Литографская мастерская И. А. Голышева во Мстре. В сб.: Народная гравюра и фольклор в России 17-19 вв. М.
- Сакович А. Г. (1999) Дмитрий Александрович Ровинский и его коллекция народной картинки. В сб.: Мир народной картинки. М.
- Снегирев И. М. (1822) Русская народная галерея, или учебные картинки. Отечественные записки. Ч. 12, No. 30. его же (1861) Учебные картинки русского народа в московском мире. М.
- Стасов В. В. (1892) Новые труды Д. А. Ровинского. Статьи и заметки, не вошедшие в собрания сочинений. Т. 2, М., 1954
- Стасов В. В. (1896) Воспоминания товарища о Д. А. Ровинском. В кн.: Публичное собрание Императорской Академии Наук в память ее почетного члена Д. А. Ровинского 10-го декабря 1895. СПб.
- Толстой И. И. (1896) Д. А. Ровинский-любитель и знаток гравировального искусства. СПб.
- Формозов А. А. (1984) Историк Москвы И. Е. Забелин. М.
- Хромов О. Р. (1992) К истории издания «Русских народных картинок» Д. А. Ровинского. Буквнистическая торговля и история книги. Межведомственный сборник научных трудов. Вып. 2. М.
- Хромов О. Р. (1997) И. Е. Забелин и Д. А. Ровинский. К вопросу о формировании исследовательского подхода ученых. Буквнистическая торговля и история книги. Межведомственный сборник научных трудов. Вып. 6. М.

Шмурло Е. (1891) Иван Александрович Голышев. СПб.

高橋一彦 (二〇〇一) 『帝政ロシア司法制度史研究』名古屋大学出版会

橋本伸也 (一九九九) 「一九世紀前半ロシアにおける教育の身分制原理とエリート学校」『京都府立大学学術報告 人文・社会』
五一号

坂内徳明 (二〇〇五) 「ドストロイ・ロヴィンスキイのこと」『なぶうぶ』五〇号

ルボーク関連

Александр Осипович Орловский (2002) СПб.

Алексеева М. А. (1976) Торговля гравюрами в Москве и контроль за ней в конце 17–18 вв. В сб.: Народная
гравюра и фольклор в России 17–19 вв. М.

Алексеева М. А. (1983) Гравюра на дереве 《Мыши кога на погост волокут》. В кн.: 18 век. Сб. 14. Л.

Алексеева М. А. (1990) Гравюра петровского времени. Л.

Андреев Н. П. (1921) Исчезающая литература. Казанский библиофил. 1921–2.

Валдина О. Д. (1972) Русские народные картинки. М.

Валдина О. Д. (1973) К вопросу о взаимоотношениях народных картинок (гравю на дереве). В сб. ст.: Русское искусство 18 века. Материалы и исследования. М.

Вахтин В. Молдавский Д./сост./ (1962) Русский лубок. М.-Л.

Вельский Л. П. (1909) Русские народные лубочные картинки. Северные сияния. 1909–4.

Верков П. Н. (1958) Материалы для библиографии литературы о русских народных (лубочных) картинках. Русский фольклор. Т. 2. Л.

- Блюм А. В. (1981) Русская лубочная книга второй половины 19 века. Книга. Исследования и материалы. Сб. 42 М.
- Блюм А. В. (1983) Система правительственной регламентации круга народного чтения во второй половине 19 в. В сб. ст. : Книжное дело в России во второй половине 19-начале 20 века. Л.
- Богуславская И. Я./сост./ (1995) Народное искусство. Исследования и материалы. Сб. ст. к 100-летию Государственного Русского музея. СПб.
- Брук Я. В. (1990) У истоков русского жанра. 18 век. М.
- Виктор Пензин. Графика, монументальное искусство. Каталог выставки. (1989) М.
- Воронина Т. А. (1990) Русский лубок 20-60 годов 19 века : производство, бытование, тематика. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. М.
- Воронина Т. А. (1993) Русский лубок 20-60 годов 19 века : производство, бытование, тематика. М.
- Воронов В. С. (1972) О крестьянском искусстве. М.
- Гаврилова Е. И. (1983) Русский рисунок 18 в. Л.
- Гаврилова Е. И. (1990) Графика. В кн. : Очерки русской культуры 18 века. Ч. 4. М.
- Голышев И. А. (1989) Собрание сочинений. Т. 1, вып. 1 и 2. СПб.
- Гончарова Н. Н. (1987) Е. М. Корнеев. Из истории русской графiki начала 19 века. М.
- Горшков Ю. А. (1983) Русский лубок : от мануфактуры к фабрике. Книга. Исследования и материалы. Сб. 47. М.
- Горшков Ю. А. (1983) Торговля народными изданиями и централизация торгового капитала в лубочном книжном деле пореформенной России. В сб. : Книжное дело в России во второй половине 19-начале 20 века. Л.
- Тригорьев Р. Г. (1996) Вагальная печатная графика в России (конеп 17-первой четверть 19 века). Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата искусствоведения. СПб.

- Грунговский А. В. (2002) Потехи страшные и смешные. Книга о фольклорном театре, скоморохах, ряженых и кулачных боях. СПб.
- Дубин В. Б. Рейтблат А. И. (1981) Из истории изучения «народной» культуры города: незавершенная книга М. М. Никитина о русском лубке. Советское искусствознание. 1980-2.
- Ермакова М. Е. Хролов О. Р. (2004) Русская гравюра на меди второй половины 17-первой трети 18 века. М.
- Зоркая Н. М. (1994) Фольклор. Лубок. Экран. М.
- Иванов Е. П. (1937) Русский народный лубок. М.
- Искусство Мстеры (1997) СПб.
- Иткина Е. И. (1985) Русский рисованный лубок конца 18-начала 20 века. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата искусствоведения. М.
- Иткина Е. И. (1992) Русский рисованный лубок конца 18-начала 20 века. М.
- Камедина Л. В. (1984) Матвей Комаров и массовая литература 18 века. Автореферат на соискание ученой степени кандидата литературоведения. Л.
- Клепиков С. А. (1948) Дермонтав и его произведения в русской народной картинке. Литературное наследство. Т. 45-46. М.
- Клепиков С. А. (1949а) Некрасов и его произведения в русской народной картинке. Литературное наследство. Т. 53-54. М.
- Клепиков С. А. (1949б) А. С. Пушкин и его произведения в русской народной картинке. 1799-1949. М.
- Клепиков С. А. (1950) И. А. Крылов и его произведения в русской народной картинке. М.
- Клепиков С. А. /сост./ (1939) Лубок. Ч.1. Русская песня. М.
- Ковгун В. (1981) Письма В. В. Кандиновского к Н. И. Кульбину. Памятники культуры. 1980. Л.

- Кожин Н.А. Абрамов И. С. (1929) Народный дубок второй половины 19 века и современный. Л.
- Комаров М. (2000) История мошенника Ваньки Каина. Миллора Георг. Подготовка текста и коммент. В. Д. Рака. СПб.
- Комерова Г. Н. (1961) Спены русской народной жизни конца 18–начала 19 веков. Л.
- Корнилова А. В. (1982) Картинные книги. Л.
- Корнилова А. В. (1990) Мир альбомного рисунка. Русская альбомная графика конца 18–первой половины 19 века. Л.
- Коростин А. Ф. (1953) Русская литография 19 века. М.
- Кузьмин Н. (1970) Русский дубок. М.
- Кузьмина В. Д. (1947) Руккописная книга и дубок во второй половине 18 века. В кн.: История русской литературы. Т. 4, ч. 2. СПб.
- Лебедев А. В. (1995) «Тшанием и усердием»: Примитив в России 18–середины 19 столетия. М.
- Лебедев А. В. (1995) Художественный примитив в контексте культуры русской провинции. Автореферат диссертации доктора искусствоведения. М.
- Лемке М. К. (1904) Очерки по истории русской цензуры и журналистики 19 столетия. СПб.
- Лотман Ю. М. (1976) Художественная природа русских народных картинок. В сб. ст.: Народная гравюра и фольклор в России 17–19 вв. М. («ロシヤの民衆版画の芸術的性格」桑野隆記「同編『ロシヤ・ナウマンギヤルムを讀む』一九八四年」勁草書房)
- Дубок. Видеоблог. Народная картина России и Германии 19–начала 20 века. (2001) М.
- Дубочная книга. (1990) Подгот. текста, сост., вступ. статья, коммент. А. Рейфоглата. М.
- Мир народной картинки. (1999) М.

- Мишина Е. А. (6. г.) Русская гравюра на дереве 17-18 вв. СПб.
- Мишина Е. А./сост./ (1979) Ранняя русская гравюра. Новые открытия. Каталог выставки. Л.
- Мисеедов Г. (1988) Русский лубок конца 19-начала 20 века. В сб.: Иллюстрация. М.
- Народная гравюра и фольклор в России 17-19 вв. (1976) М.
- Народная картина 17-19 веков. Материалы и исследования. (1996) СПб.
- Новая жизнь старого жанра. Лубок. (1985) Декоративное искусство СССР. 1985-12
- Овсянников Ю. М. (1962) Русский лубок. М.
- Овсянникова Е. Б. (1981) Из истории первых выставок лубка. Советское искусствознание. 1980-2
- Овсянникова Е. Б. (1999) К реконструкции «Первой выставки лубков» в Москве (1913) В сб.: Мир народной картины. М.
- Овсянникова Е. Б. (2001) Дарионов и Гончарова. В сб.: Н. С. Гончарова и М. Ф. Дарионов. Исследования и публикации. М.
- Островский Г. С. (1974) О природе русского изобразительного фольклора. Советская этнография. 1974-1
- Островский Г. С. (1981) Лубок в системе русской художественной культуры 17-20 вв. Советское искусствознание. 1980-2.
- Пензин В. (1995) Новая жизнь лубка. Чудеса и приключения. No. 10, Октябрь 1995.
- Плонников В. И. (1987) Фольклор и русское изобразительное искусство второй половины 19 века. Л.
- Поляков В. (1998) Книги русского кубофутуризма. М.
- Поспелов Г. Г. (1990) «Бубновый валет»: Примитив и городской фольклор в московской живописи 1910-х годов. М.
- «Представь мне шегола...» Молода и костом России в гравюре 18 века. (2002) М.

- Примитив в изобразительном искусстве. Материалы всероссийской научно-практической конференции. (1995) М.
- Примитив в изобразительном искусстве. Материалы научной конференции. 1995. (1997) М.
- Примитив в искусстве грани проблем. (1992) М.
- Примитив и его место в художественной культуре Нового и Новейшего времени. (1983) М.
- Примитив в России. Иконопись, живопись, графика. (1995) Каталог выставки. М.
- Рейнблат А. И. (1991) От Бовы к Вальмонту. М.
- Рейнблат А. И. (2001) Как Пушкин вышел в гении. М.
- Рогинская Ф. С. (1929) Советский лубок. М.
- Рогов А. П. (1978) Черная роза. М.
- Рогов А. П. (1988) Старинная потеха. М.
- Рогов А. П. (2003а) Мир русской души, или История русской народной культуры. М.
- Рогов А. П. (2003б) Наш путь. М.
- Рудакова Н. И. (1991) Русские лубочные картинки второй половины 19 века. В сб.: Русская и зарубежная графика в фондах ГПБ. им. М. Е. Салтыкова-Щедрина. Л.
- Рудакова Н. И. (1992) мода в зеркале лубка. Гардепон 1, СПб.
- Русская народная картина 17-19 веков. (1980) Каталог выставки. Л.
- Русская лубочная книга 17-19 веков. (1994) Описание коллекций. М.
- Русский военный лубок. Ч. 1-3. (1995) М.
- Русский лубок. (1962) М.-Л.
- Сакович А. Г. (1971) Русский лубок на дереве 17-18 вв. Декоративное искусство СССР. 1971-10
- Сакович А. Г. (1972) Русский лубок на меди. Декоративное искусство СССР, 1972-9

- Сакович А. Г. (1980) Лубки о персидском слоне, приведенном в Москву в 1796 году и басня И. А. Крылова «Слон и Мышька». Сообщения ГМИИ им. А. С. Пушкина. Вып. 6. М.
- Сакович А. Г. (1991) «Некоторое царство—некоторое государство» в русской лубочной книжке 18–19 веков. Сообщения ГМИИ им. А. С. Пушкина. Вып. 9. М.
- (Свиньин П. П.) (1822) Примечания издателя отечественных записок. Отечественные записки. Ч. 12. No. 30.
- Соколов Б.М. (1994) Художественный язык русской народной гравюры 17–19 веков. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата искусствоведения. М.
- Соколов Б.М. (1998) Кандлинский—коллекционер русского лубка. В кн.: Многогранный мир Кандлинского. М. Соколов Б.М. (1999) Художественный язык русского лубка. М.
- Традиционная культура. Научный альманах. (2001), No. 2.
- Харламов И. (1881) Русский народный юмор. Делю. 1881–12.
- Хромов О. Р. (1991) Историография русской лубочной карточки 19 столетия./И. М. Снегирев, Ф. И. Буслаев, Д. А. Ровинский/Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. М.
- Хромов О. Р. (1994) Цензор и религиозный лубок в России. В сб.: Книжное знание в отечественной культуре 18–20 веков. М.
- Хромов О. Р. (1996) О бытовании Брюсова календаря в 18–19 веках. В сб.: Букминистическая торговля и история книги. Вып. 5. М.
- Хромов О. Р. (1998) Русская лубочная книга 17–19 веков. М.
- Хрущов И. П. (1901) Современные дешевые издания для народного чтения. В кн.: Сборник литературных, исторических и этнографических статей и заметок. СПб.
- Чтение в дореволюционной России. Сб. науч. тр. Вып. 2 (1995) М.

Шкловский В.Б. (1929) *Марвей Комаров. Жизнь города Москвы*. Л.

Claudon-Adhemar, C. (1977) *Imagerie populaire Russe*. Milan

Claudon-Adhemar, C. (1985) *Image et Societe en Russie 1668-1725*. Berne

Farrell, D.E. (1991) Medieval popular humor in Russian eighteenth century Lubki. *Slavic Review*. Vol. 50-3

Farrell, D. E. (1993) Shamanic elements in some early eighteenth century Russian woodcuts. *Slavic Review*. Vol. 52-4

Jahn, Hubertus F. (1995) Patriotic culture in Russia during World War I. Cornell University Press

The Lubok. Russian Folk Pictures, 17th to 19th Century. (1984) Leningrad

Mikhailova, Y. Images of Enemy and Self: Russian "Popular Prints" of the Russo-Japanese War. (1998) *Acta Slavica Japonica*. T. 16

Parton, Anthony (1993) *Mikhail Larionov and the Russian Avant-Garde*. Princeton University Press

Rudakova, N. (1990) *Mirror to a Traditional World. Tradition and Revolution in Russian Art*. Leningrad

Weiss, P. (1995) *Kandinsky and Old Russia*. Yale University Press

伊藤恵子 (一九九二)「ルポックとドイツ人」『窓』八〇

大石雅彦 (二〇〇三)『マレーヴィチ考』人文書院

小野忠重 (不詳)「ロシア・ソヴェートの版画」

金光不二夫 (一九八四)「ルポック覚え書(一)」『なろうど』一〇

桑野隆 (一九八二)「民衆的想像力の空間」『未完のポリフォニー』一九九〇年、未来社)

桑野隆 (一九九六)『夢見る権利 ロシア・アヴァンギャルド考』東京大学出版会

坂内徳明 (一九八四)「ルポックへの道」『窓』五〇

- 坂内徳明（一九九五）「ロシア民俗学史における「民衆版画（ルボーク）」」『一橋大学研究年報・人文科学研究』三三一
- 坂内徳明（二〇〇六）『ルボークーロシアの民衆版画』東洋書店
- J・E・ボウルト編著（一九八八）『ロシア・アヴァンギャルド芸術 理論と批評 一九〇二―三四年』川端香男里、望月哲男、西中村浩訳、岩波書店
- 松田弘（二〇〇一）「シャガールとロシア美術―創造の源泉としてのイコンとルボーク」『ボンピドーセンター／シャガール家秘蔵作品 マルク・シャガール展』カタログ